

高宮廃寺

—寝屋川市大字高宮—

発掘調査概要報告 VI

1985・3

寝屋川市教育委員会

高宮廃寺

—寝屋川市大字高宮—

発掘調査概要報告 VI

1985・3

寝屋川市教育委員会

序 文

生駒山地西麓に派生した寝屋川市の東部丘陵地帯は、高地性集落の太秦遺跡や古墳時代終末期の著名な石の宝殿古墳など数多くの古代遺跡が今日に残されていることで人々によく知られている地域です。

今回発掘調査を実施いたしました高宮の地は、河内平野を一望することができると景地にあり、河内平野と北河内の台地との接点に位置しています。過去の発掘調査により、寝屋川市内でも古くから人々が生活を営んでいた地であり、丘を中心として古代氏族による集落が形成され、彼らによって白鳳時代には現在国の指定史跡となっている高宮廃寺が創建されたことなど、古代の姿が明らかになりました。

今回の調査は、二つの尾根に挟まれた谷あい地でしたが、貯水池的な水利施設と考えられる石組遺構を発見することができましたことは、先に発見しております古代集落の全体像を明らかにする上で大いなる収穫であったと思われます。

今回の調査の実施にあたり、ご協力ご援助をいただきました土地所有者の方々をはじめ、地元の方々、大阪府教育委員会ならびに関係各位には心よりお礼を申し上げますとともに、直接調査に従事していただきました数多くの皆様に対しまして深く感謝の意を表わす次第です。

寝屋川市教育委員会

教育長 坂 中 僕

例　　言

1. 本書は、寝屋川市教育委員会が昭和59年度国庫補助（総額3,000,000円、補助率－国庫50%、府費25%）を得て実施した大阪府寝屋川市大字高宮所在の史跡高宮廃寺跡周辺高宮遺跡の発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、昭和59年10月1日に着手し、昭和60年3月31日まで調査及び整理作業を実施した。
3. 発掘調査は、大阪経済法科大学講師瀬川芳則を調査顧問とし、寝屋川市教育委員会社会教育課塩山則之を担当者とし、補助員として奥田達治があたった。
4. 本書の作成については、塩山が執筆し、実測・トレースは塩山、増崎勝敏、鴨林齊亭、浜田幸司が、写真撮影は塩山がそれぞれ行った。
5. 発掘調査の進行及び報告書の作成などについては、大阪府教育委員会文化財保護課井藤徹、堀江門也、東大阪市教育委員会下村晴文、四條畷市教育委員会野島稔、財団法人枚方市文化財研究調査会の諸氏、諸機関から種々のご指導、ご教示を受けた。記して厚く感謝の意を表します。
6. 発掘調査の進行については、心よく大切な土地を提供していただいた土地所有者の入江藤吉、小寺忠彦の各氏、また、地元自治会には終始懇切なご協力をうけることができた。記して厚く感謝の意を表します。

目 次

序 文

例 言

I 位 置 と 環 境	1
II 調 査 に 至 る 経 過	4
III 調 査 の 概 要	7
IV 遺 物	10
V 遺 物 観 察 表	14
VI ま と め	21
図 版	

図版目次

図版 1	高宮遺跡周辺遺跡分布図	25
図版 2	調査地位置図	27
図版 3	調査地平面図	29
図版 4	各トレンチ平面図	31
図版 5	トレンチ断面図	33
図版 6	出土遺物実測図	35
図版 7	出土遺物実測図	37
図版 8	出土遺物実測図	39
図版 9	出土遺物実測図	41
図版10	出土遺物実測図	43
図版11	出土遺物実測図	45
図版12	調査地遠景	47
図版13	調査地近景	49
図版14	第1トレンチ写真	51
図版15	第1トレンチ写真(石組遺構)	53
図版16	第1トレンチ写真(石組遺構)	55
図版17	第1トレンチ写真(遺物出土状況)	57
図版18	第2トレンチ写真	59
図版19	第2トレンチ写真(石組遺構)	61
図版20	第2トレンチ写真	63
図版21	第3トレンチ写真	65
図版22	第3トレンチ写真	67

図版23	出土遺物写真	69
図版24	出土遺物写真	71
図版25	出土遺物写真	73
図版26	出土遺物写真	75
図版27	出土遺物写真	77
図版28	出土遺物写真	79
図版29	出土遺物写真	81
図版30	出土遺物写真	83
図版31	出土遺物写真	85
図版32	出土遺物写真	87
図版33	出土遺物写真	89
図版34	出土遺物写真	91

插 図 目 次

插図1	第一トレンチ石組遺構	9
插図2	出土遺物実測図	13

I. 位置と環境

大阪府寝屋川市大字高宮に所在している国指定史跡高宮廃寺跡は、生駒山系の西側斜面から派生する洪積層の寝屋川市東部丘陵南端海拔28m前後の丘陵地形を利用した位置に立地している。この高宮廃寺跡の所在する高宮の丘陵を中心として南及び西に広がりをもつて高宮遺跡が存在している。

高宮廃寺跡及び周辺の高宮遺跡の調査は、過去数回実施され、その都度重要な遺物や遺構が発見されている。

大阪府教育委員会により昭和28年に実施された高宮廃寺跡の発掘調査は、東塔跡を中心として調査がなされ、塔基壇、塔心礎等を検出し軒丸瓦をはじめ多くの遺物を出土した。出土した素弁八葉蓮華文軒丸瓦等から当廃寺の創建が白鳳時代に遡ることが判明した。その後、昭和54年度に寝屋川市教育委員会が実施した高宮廃寺跡範囲確認調査（第1次調査）では、寺院の主要伽藍の規模と位置関係及び、各建物の創建期に使用された素弁八葉蓮華文軒丸瓦を出土したことにより当廃寺は、短期間の間に建設されたことが明らかになった。

生駒山系の西麓に派生した台地は、おもに洪積世の大坂層群によって形成されており、北は京都府八幡市の八幡丘陵（男山丘陵）、枚方台地から、南は四條畷市の南野丘陵までつづく淀川左岸に形成された広大な丘陵及び台地であり、高宮遺跡及び高宮廃寺跡のある寝屋川市東部丘陵地域は、ほぼその中心に位置している。

この生駒山系西麓の丘陵地帯には、旧石器時代から各時期を通じて数多くの遺跡の存在が知られている。

旧石器時代には、有舌尖頭器、国府型のナイフ形石器、石核、翼状剝片、水晶製ナイフ形石器等を出土した八幡丘陵西麓の枚方市楠葉東遺跡、切り出し状の小型ナイフ形石器、国府型ナイフ形石器、石核、剝片などが出土した藤阪宮山遺跡、その藤阪宮山遺跡と穂谷川をはさんで対峙する津田三ヶ池遺跡では、国府型ナイフ形石器、小型ナイフ形石器、搔器などが出土し、藤阪南遺跡からは木葉状尖頭器が出土しており、北山遺跡からナイフ形石器、交北城の山遺跡から国府型ナイフ形石器、出屋敷遺跡からナイフ形石器、星ヶ丘西遺跡から舟底形石器、ナイフ形石器、村野遺跡から国府型ナイフ形石器、小倉東遺跡から小型舟底形石器、藤田土井山遺跡からは、有舌尖頭器がそれぞれ出土している。

交野市の神宮寺遺跡からは、国府型ナイフ形石器、有舌尖頭器、石核等が出土し、星田付近でも尖頭器が出土しており、布懸遺跡からは、小型のナイフ形石器、剝片等が出土している。寝屋川市の高宮遺跡からは、国府型ナイフ形石器、翼状剝片等が出土し、太秦遺跡では古墳の盛土内からナイフ形石器、打上の市立第四中学校裏手の丘陵端でナイフ形石

器がそれぞれ表面採集されている。四條畷市と寝屋川市の境界を流れる讚良川川床に形成された四條畷市更良岡山遺跡では、大型両刃の礫器、国府型ナイフ形石器を含むナイフ形石器、削器、彫器、細石刃、舟底形石器、石刃、翼状剝片、石核等が出土し、木葉状尖頭器を出土した岡山南遺跡、有舌尖頭器を出土した南山下遺跡、生駒山地内の田原盆地の田原遺跡では尖頭器が出土し、忍陵遺跡ではナイフ形石器が出土するなど、20を越える旧石器時代の遺跡の存在が確認されている。

縄文時代になると、早期初めの編年基準となった尖底の押型文をつけた「神宮寺式土器」として学史上有名な交野市神宮寺遺跡、神宮寺式に後続する「穂谷式」の名で知られる枚方市穂谷遺跡、神宮寺式の橢円状押型文の原体を陰陽逆転して陰刻した土器を出土する大東市寺川堂山下遺跡があり、前期には、チャートを使った半磨製の魚形石鏃（所謂とろとろ）等を出土した枚方市穂谷遺跡をはじめ、津田三ツ池遺跡、寝屋川市高宮遺跡が知られている。中期になると、「キャリバー式土器」とよばれる中期の典型的な特徴をもつ土器を出土した交野市星田旭遺跡、船元式土器を出土する四條畷市南山下遺跡、砂遺跡があり、後期、晩期には、小児棺として使用された埋甕を出土した枚方市交北城の山遺跡、寝屋川市小路遺跡、中津式、滋賀里式、船橋式土器等を出土している四條畷市更良岡山遺跡が所在している。

弥生時代には畿内第Ⅰ様式中段階の壺及び甕をそれぞれ出土した四條畷市雁屋遺跡のほか、田原遺跡、大東市中垣内遺跡があり、中期には、竪穴式住居と高床式の掘立柱建物跡や井戸からなる集落の一部と、42基の方形周溝墓の墓域が発見された枚方市交北城の山遺跡、高地性集落として有名な田の口遺跡、甕の口縁部端部にキザミ目がめぐる畿内第Ⅱ様式の土器を出土し、河内平野と枚方台地の接点丘陵頂部に位置する高地性集落として注目されている寝屋川市太秦遺跡がある。

後期になると、淀川左岸地域の遺跡の数は膨大な数にのぼり、焼けおちた住居跡を検出した枚方市長尾西遺跡、津田城遺跡、集落と方形周溝墓の墓域を区画するV字溝等を検出した星ヶ丘西遺跡、小型彷製重圓文鏡、分銅形土製品、手焙形土器、異形土器を出土し淀川を見おろす位置にある鷺塚山遺跡、六角形の竪穴式住居を検出した山之上天堂遺跡、寝屋川市においては、高宮遺跡の南約300mにある小路遺跡が知られている。

古墳時代には、前期に天野川河口付近の淀川をのぞむ台地上に築かれ、京都府椿井大塚山古墳出土の銅鏡と同範関係にある吾作銘四神四獸鏡など八面の銅鏡を出土した枚方市万年寺山古墳、三基の粘土櫛をもち画面帶神獸鏡・銅鏡・碧玉製の蝶形石製品等を出土した藤田山古墳、粘土櫛内から硬玉製勾玉・ガラス製小玉・碧玉製管玉・鉄製品等を出土した交野市妙見山古墳、交野山西麓の海抜100m前後に前方後円墳5基、円墳3基からなる森古墳群、全長約80mの前方後円墳で長さ約6.3m、幅約1m、高さ約0.7mの竪穴式石

室を有する四條畷市忍ヶ岡古墳が知られている。中期になると、ノヅチ伝承をもつ枚方市禁野車塚古墳、二重の空濠をもつ牧野車塚古墳、方形の周濠をめぐらす円墳や筒形銅器・巴形銅器・家形埴輪・横矧板鋸留短甲を模した形象埴輪等が出土した交野市寺・車塚古墳群、四條畷市墓の堂古墳がある。後期になると、枚方市中宮古墳群、朱彩の横穴式石室をもつ白雉塚古墳、八基の円墳からなる交野市倉治古墳群、義道をもたない片袖式の横穴式石室をもつ古墳で形成されている寺古墳群、寝屋川市においては、神武東征伝承と「野見宿禰の墓」の伝承をもつトノ山（高塚）古墳、太秦1号墳、廻シ塚や水晶製切子玉・金銀環等を出土したゲンゲン谷古墳を含み、六鈴鏡・三環鏡・塗りの革製盾の残片等を出土した太秦古墳群、北河内地方最大規模の横穴式石室（無袖式）をもつ円墳の寝屋古墳、江戸時代『河内名所図会』に「八十塚（やそつか）」として紹介されているが後世の開墾等のためほとんどその姿を消してしまった打上古墳群、長さ約3m、幅1.5mの板状の花崗岩を下石とし、その上に直径約3m、高さ約1.5mの巨岩を置き奥行約2.3m、幅約0.9m、高さ約0.7m、開口部幅0.5mの両袖式の横口式石槨がくりぬかれ、国の史跡に指定されている古墳時代終末期のものとして著名な石の宝殿古墳があり、蓋形埴輪のほか多数の埴輪を出土した四條畷市更良岡山古墳群がある。

切妻造りの家形埴輪や円筒埴輪等を出土した四條畷市岡山南遺跡、人物埴輪の頭部や蓋形埴輪を出土した古墳時代中期の忍ヶ丘駅前遺跡、5世紀後半の多量の製塙土器を出土した中野遺跡、石敷製塙炉や方形周溝状の周溝内から四体分の小型の古代馬（蒙古系馬）の骨を出土した奈良井遺跡などの古墳時代の集落が知られている。

高宮廃寺跡西側に広がる高宮遺跡の所在する丘陵頂上付近では、一辺約1mの巨大な柱穴をもつ掘立柱建物群や一辺約4mの堅穴式住居群が発見されており、掘立柱建物群と堅穴式住居群とは長い柵列によって区画されていたようである。出土した遺物から、飛鳥・白鳳時代の集落遺跡で、この地に居住した人々によって白鳳時代初頭に高宮廃寺が創建されたことが推察されている。現在、高宮廃寺跡の西塔推定地には、天萬魂命を祭神とする延喜式内社大社御祖神社（おおもりみおやじんじや）が鎮座しているが、昭和55年に現在の社殿北西約50mの旧社殿伝承地で実施した発掘調査において神社遺構と推定される2間×3間の掘立柱建物跡を検出している。さらに西約150mには、江戸時代讚良郡の一の宮とされ天萬魂命の子神を祭神とする延喜式内社高宮神社が鎮座している。

古代寺院関係の遺跡としては、四天王寺創建時の瓦を焼いた枚方市楠葉瓦窯、中山鋼音寺跡、百濟寺南遺跡、特別史跡百濟寺跡、交野市長法寺跡、寝屋川市太秦廃寺跡、高柳廃寺跡、寝屋川市と四條畷市にまたがる讚良寺跡、四條畷市正法寺跡などが知られており、周辺各市においても注目すべき多くの遺跡の分布がみられる。

II. 調査に至る経過

高宮の丘陵は、生駒山系西麓に派生する洪積層の寝屋川市東部丘陵の南端、北東から南西へゆるやかに傾斜した海拔28m前後の丘陵地形で、河内平野と枚方台地へづく丘陵との接点に位置している。

この丘陵上には、国の史跡に指定されている高宮廃寺跡が所在している。

高宮廃寺跡の所在する延喜式内社大社御祖神社境内には、散在する礎石や建物跡と推定される土壇、古瓦の散布により古くから寺院跡の存在が知られていた。高宮廃寺跡は、過去数回にわたって発掘調査が実施され、その都度多くの成果を上げてその全容が明らかになりつつある。

特に昭和28年大阪府教育委員会によって実施された東塔跡の発掘調査の成果により、從来の出土遺物から当廃寺の創建は、奈良時代前期（天平時代）と推定されていたが、この調査で白鳳時代に属する素弁八葉蓮華文軒丸瓦等の出土により創建時代が白鳳時代に遡ることが判明した。さらに、昭和54年寝屋川市教育委員会が実施した高宮廃寺跡範囲確認調査（第1次調査）により、金堂跡・講堂跡・中門跡・回廊跡などの主要伽藍の規模及び位置関係を明らかにでき、主要建物の各所から創建時に使用された素弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土しており、当廃寺は短期間の間に主要伽藍が建設されたことが明らかになった。また、他の出土瓦等から当廃寺は、数回の火災にあり、奈良時代末あるいは平安時代初頭に焼失し、のちに旧講堂跡を利用して鎌倉・室町時代に延喜式内社大社御祖神社の神宮寺として再び法燈がともされたことが判明した。その結果、昭和55年5月13日付をもって国の史跡指定を受けるに至った。

高宮廃寺の所在する高宮の丘陵上の畠地では、從来から須恵器や石鎚等の遺物の採集があり、遺跡の存在する可能性が指摘されていた。

昭和55年高宮廃寺跡の西側に広がるこの畠地一帯に宅地開発の計画があり、事前の発掘調査を実施することになった。

調査の結果、縄文時代から中世に至る時期の遺物、遺構を発見した。縄文時代の遺構としては、橢円形で舟底型をした土壙を検出し、その土壙内より薄手の縄文式土器片、石鎚、剥片等を発見した。さらに、一辺約1mの掘りかたの巨大な柱穴が9か所並ぶ2間×3間の掘立柱建物跡をはじめとする掘立柱建物跡5棟や、一辺約4mの竪穴式住居跡5棟を発見した。この掘立柱建物跡群と竪穴式住居跡とは、長い柵列によりほぼ区画された集落構造をもっていた。出土遺物から、これらの集落が古墳時代終り頃から飛鳥・白鳳時代の時期のものであり、この地に居住した氏族により高宮廃寺が創建され、氏寺を造営するために

その居住地を氏寺氏神並立の地として提供したことが推察され、この遺跡の重要性が指摘されている。

これらの掘立柱建物跡の内、一辺1mの掘りかたの巨大な柱穴をもつ高床式の掘立柱建物跡の遺構は、現在児童公園内に保存されている。

現在高宮廃寺跡の西塔跡と推定されている地には、天萬魂命を祭神とする延喜式内社大社御祖神社が鎮座しているが、西北約50mの隣接地に旧宮地と伝承されている一画があり、高宮廃寺跡第2次調査としてその地周辺の発掘調査を実施した。その結果、周辺の畠地より一段高くなっているこの旧宮地と伝承されている調査区から、創建期の神社社殿遺構と推察される桁行5.7m、梁行4.2mで3間×2間の南面する東西棟の掘立柱建物跡を発見した。さらに、この旧宮地伝承地の東側で、建物の長辺20m以上、短辺15m以上で棟の示す方向がN50°Wという5間×4間以上の巨大な掘立柱建物跡を発見した。この建物跡は、先の宅地開発の事前調査で発見した2間×3間の掘立柱建物跡の北約50mにあたり、その柱穴の掘りかたも同様に一辺が約1m以上あるもので、棟の示す方位もほぼ同じ方向であり同時期のものと推察される。

昭和56年度には、第2次調査と宅地開発に伴う事前調査で実施した調査地との間を、第3次調査として実施し、同様の巨大な掘りかたをもつ柱穴と古墳時代後期の堅穴式住居跡及び立方体の土壙等を検出している。

昭和57年度に実施した第4次調査では、ナイフ形石器をはじめ縄文式土器片及び石鏸、その他須恵器・土師器等を出土している。ナイフ形石器の出土は、生駒山系西麓における旧石器時代の研究に寄与するものであり、縄文式土器は、先年の調査で出土したように土壙内から出土しており、同時代の遺跡の広がりを示すものである。そして、少數ではあるけれども円筒埴輪片が出土していることから、この高宮の丘陵上ではこれまでに古墳は発見されていないけれども、北隣の丘陵尾根上には古墳時代後期のトノ山（高塚）古墳を盟主墳とする太秦古墳群が存在しており、この丘陵上においてもかつて古墳が築造されていた可能性を示唆するものである。さらにこの調査において、廃寺西南側がかつて谷間地形であったことも判明し、断面観察によると古代氏族の集落形成時に谷は埋められ平坦にされ、さらに氏寺造営時に再度整地されたことも判明した。

さらに高宮の丘陵南側端部付近の水田地の調査では、丘陵頂部付近で検出した掘立柱建物跡と同時期と推定される掘立柱建物跡を数棟検出し、さらに南へ延びる様相を呈し集落の広がる可能性を示唆するものであった。

その他、木棒の施設をもつ平安時代の井戸を発見した。この井戸は、横板二段の井筒の上に「コ」字型に削り抜いた井筒材を二枚組み合せて据えた。削抜プラス横板井戸である。この井筒内より「保延六年」（1140年）の墨書銘のある曲物の桶が出土し、同時に曲

物直下から瓦器碗も出土しており、瓦器碗の編年研究上貴重な資料となるものであり、井戸の祭祀等の研究においても新たな資料を提供するものとなった。

史跡高宮廃寺跡隣接地での過去の調査は、廃寺の西への広がりと関連遺構の検出と、先に発見されている廃寺造営に直接かかわった古代氏族の居住地と氏寺造営地との関連を考古学的に解明することを目的としたものであり、今回も同様の目的をもって調査を実施したるものである。

III. 調査の概要

今回の調査は、史跡高宮廃寺跡の西南に隣接する寝屋川市大字小路369、高宮177・178番地の畠地について、高宮廃寺跡関連遺構と高宮廃寺を氏寺、延喜式内社高宮神社及び大社御祖神社を氏神とする古代氏族の居住地と氏寺造営地との関連を調査することを目的として実施した。

現状では、東西二つの尾根に挟まれた谷間地形であり現在は畠地となっているが、二十数年前までは水田として耕作されていた。東の尾根は史跡高宮廃寺跡国指定地で、西側は巨大な柱穴をもつ掘立柱建物跡で形成された古代氏族の居住地が発見されている。

調査は、各畠地ごとに東西方向に幅2mのトレンチを任意に設定して実施した。トレンチ番号は、南から第1トレンチ・第2トレンチ・第3トレンチとした。

調査地は、北から南へ傾斜しており、現地表で、小路369番地と高宮177番地は1m、高宮177番地と高宮178番地は1.5mの比高差が認められ、高宮178番地と南の一段下った畠地との比高差は1.5m認められる。

1. 第1トレンチ（高宮178番地）

高宮178番地の畠地の中央に東西方向に設定した東西22.3m×南北2mのトレンチである。

遺構としては、現地表下約50cmのところで4ヶ所のピット及び溝、落ち込みを検出した。それらの遺構は、トレンチ西端に集中して検出されている。出土遺物がないために時期は不明である。

さらにその下層（現地表下1.3m）において石組遺構を検出した。

2. 第2トレンチ（高宮177番地）

高宮177番地の畠地中央に、東西方向に設定した東西17.5m×南北2mのトレンチである。第2トレンチは、第1トレンチの北約9mのところに位置している。

トレンチ東端の、現地表下約1.3mで地山を検出し、地山は西へ向って傾斜している。地山の西で第1トレンチで検出したものと同様の石組遺構を検出している。この石組は、第1トレンチ東端検出と同様に崩れしており、遺存状況は良くない。

トレンチ西端において、現地表下約0.5mで地山を検出した。地山は東に向ってテラス状に段をもって落ちて行っており、一段目と二段目の落差は約1mを測る。段の落ち肩付近で、約50cm台の柱穴を3ヶ所検出している。柱穴内からは、少量の土師器を出土しているのみである。

3. 第3トレンチ（小路369番地）

小路369番地の畠地中央に、東西方向に設定した東西19m×南北2mのトレンチである。

第3トレンチは、第2トレンチの北約8mに位置している。

トレンチ東端で、現地表下約2.1mで地山を検出した。地山は、急角度をもって西側に傾斜している。トレンチ西端では、約30cmで地山となり、約30度の角度をもって東へ傾斜し、この地山傾斜面に8ヶ所の柱穴を検出している。

4. 遺構

a. 石組遺構

石組遺構は、第1トレンチ及び第2トレンチの東端で検出している。

第1トレンチの石組遺構は、トレンチ中央部付近の現地表下約1.5mで検出した。

西側は、東西で確認することができ、幅は上端で約6.5m、下端で約5mを測る。

西側の石組の遺存状況は非常に良好で、20cmから人頭大の花崗岩が4~6段積まれており、高さ約50cmを測る。東側の石組の遺存状況は悪く、西側に崩れしており、西側の石組と同程度の花崗岩が約3mの範囲に散乱している。

第1トレンチの北側9mの所に設定した第2トレンチ東端においても石組遺構が検出されている。この地点での石組遺構は、第1トレンチ東側石組遺構と同様に遺存状況は良くなく、西側に崩れおり、約3mの範囲で第1トレンチ検出と同程度の花崗岩が散乱している。なお、第2トレンチ西側及び第3トレンチでは、石組は検出していない。

石組遺構の全体規模については不明であるが、その石組は谷間地形に添って南北方向に配列されており、谷間を利用した貯水池的な水利施設と推察される。

b. 柱 穴

柱穴は、第1から第3の各トレンチにおいて検出している。

第1トレンチの柱穴は、トレンチ東端地山において検出しており、小さくて浅い柱穴群である。

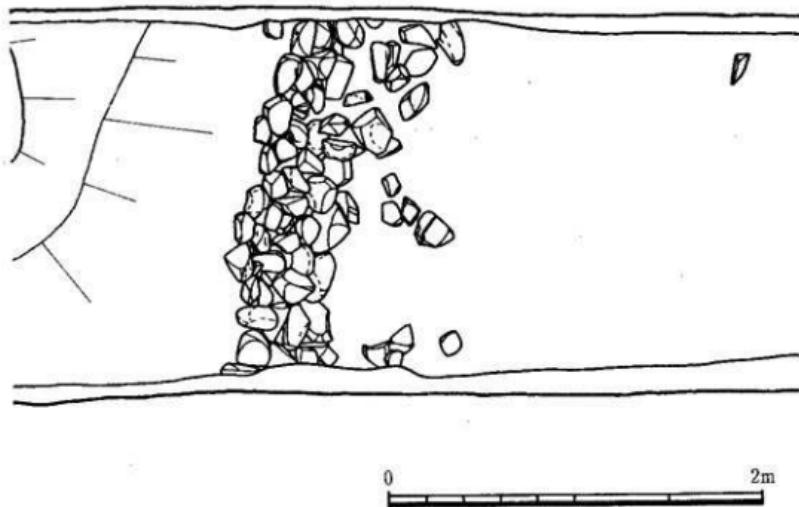
第2トレンチの柱穴は、トレンチ西端の地山が階段状に落ちる落ち肩のところに、50cm角の並ぶ柱穴3ヶ所を検出している。

第3トレンチの柱穴は、トレンチ西端の約30度の角度で傾斜する地山に検出している。

それぞれの柱穴からの出土遺物は小量であるため、時期決定までには至らなかった。

c. その他

各トレンチの断面観察から、現地表下約30~50cmまでは、幅5~10cmの薄い層がほぼ平行に堆積しており、それぞれの堆積層内から出土する遺物は中世以降の土師質土器片が中心であり、出土量も多くない。



挿図1 第1トレンチ西石組遺構

IV. 遺物

今回の調査地からの出土遺物としては、須恵器、土師器、瓦器、瓦、縁釉陶器、砥石、円筒埴輪片等がある。

須恵器

壺杯（杯身）（図版6・23・24・25-1~15）

高台を伴わないもの（1~8）と伴うもの（9~15）とに別けられる。

(1)は、たちあがりは内傾してのび、端部は若干の凹面を仕上げられている。底体部は深く丸味をもっており、受部は水平にのび、端部は丸い。(2)は、たちあかり部は欠損しているが、(1)と同様の様相を呈している。(3)は、たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび端部は丸い。底体部は丸味をもっている。(4~8)は、高台を付さないもので、体部、口縁部は上外方にのび、端部は丸く仕上げている。底部は平らに近い形を呈している。(9~15)は底部に高台を付すもので、高台は「八」の字形を呈し、端部は平面を成している。高台は、内側で接地するもの（9・12~15）と外側で接地するもの（10・11）に別れる。

壺杯（蓋）（図版7・25-16~21）

(16)は、口縁部はほぼ垂直に下り、端部は丸い。天井部は高く丸味をもっている。(17)は、口縁部は下外方にのび、端部は丸い。天井部はほぼ平らに成っている。(18~20)は、天井部に擬宝珠様のつまみを付す蓋である。天井部は、ほぼ平らに近く、(20)の中央部は若手凹み加減である。(19)は、内面に端部の丸い内傾するかえりを有している。(21)は、広口壺の蓋である。口縁部は直立し、端部は外傾する平面を有する。天井部は低く平らである。

壺（図版7・26・27-22~27）

(22)は、上部が欠損している。底部端に「八」の字形にひろがる高台を付し、端部は平面を成している。

(23)は、長頸壺の胴部であり頸部が欠損している。肩部は下外方に張り丸く体部をなす。体部と底部の境に外彎気味に下外方に開く高い高台を付し、高台は内側で接地する。底部は平らに仕上げられている。外面及び底部内面に自然釉が付着している。

(24~27)は壺の頸部である。(24)は口頸部は外彎して外傾し端部は丸く仕上げられている。口頸部内面に自然釉が付着している。(25)は、ほぼ垂直に立ち上がる口頸部を有し、1條の沈線を有している。(26・27)は、外彎気味に外傾する口頸部を有し、口頸部に2~3條の沈線を有している。

甕 (図版8・27-30・32)

(30) は外彎して外傾する口縁部を有し、口縁部は外方へ屈曲し肥厚させている。端部は丸く仕上げている。(32) は、口縁部のみの出土であるが、上外方にのび端部は平坦面を有している。

瓶子 (図版9・27-33)

上部は欠損している。体部は上外方にのび、底部近くでやや外彎する。底部は厚く平らである。底部外面は、糸切りの跡が残っている。

蓋 (挿図2・図版33-1)

口縁部は直立気味で、端部は丸く仕上げている。天井部は低く、ほぼ平らである。

土師器

甕 (図版8・9・27・28・29-28・29・31・34・35・36)

(28) は、外反して立ち上がる口縁部を有し、端部は外傾する凹面を有している。肩部外面は斜方向の刷毛目調整を行い、他はナデ調整を行っている。(29) は、外反して立ち上がった後屈曲して斜上方にのびる口縁部を有し、端部はわずかに肥厚している。口縁部内外面ともナデ調整を施し、肩部外面には、横方向の刷毛目が施されている。(31) は、直線気味に斜上方にのびる短い口縁部を有し端部は外傾する平坦面を有している。

口縁部内外面とも横ナデ調整である。(34) は、「く」の字形に屈曲し、上外方にのびる口縁部を有している。口縁部は内外面とともに、横ナデ調整を施し、肩部外面には縦方向の刷毛目調整、肩部内面は横方向の刷毛目調整を施している。(35) は、「く」の字形に屈曲し肥厚した上外方にのびる口縁部を有し、口縁部内面には横方向の刷毛目が残り、肩部外面上方は乱方向の刷毛目、その下は斜方向の刷毛目を施している。肩部内面には指頭圧痕が残っている。(36) は若干内傾した口縁を有し、端部は平坦面をなしている。

口縁内面は横ナデ調整を施し、体部外面には横方向の刷毛目が残る。体部内面は、横方向のヘラ削りを行い、指頭圧痕も残っている。肩部外面にはヘラ圧痕文が残されている。

高杯 (脚部) (図版10・29・30-37-45)

(37-44) は、中空の脚柱部である。(39・43) には、脚柱部内面にしづら痕がみられる。(45) は、中実の脚柱部をもち、なだらかに裾部へ移行している。裾部に移行する部分に径10mm程度の円孔を三方に穿つている。

高杯 (杯部) (挿図2・図版33-2-5)

(2) は、外面にたて方向の刷毛目を施している。

皿 (図版10・30・31-46-49)

口径15cm以上のもの(46・48・49)と、10cm以下(47)とが出土している。(46・47)は平坦な底部を有し、(48)はやや丸みをもった底部を有している。(46・49)は、底部

外面に指頭圧痕を残しているが、他の皿は内外面ともナデ調整施している。

杯（図版10・31-50）

上外方に立ち上った口縁部は、屈曲し外反してのび、口縁端部はまるい。体部内外面は、歪整方向のナデ、口縁部の内外面は、横ナデ調整を施している。体部外面には、指頭圧痕が多く残っている。

壺（図版10・-51）

剣部のみの出土である。外反して立ち上がった後、屈曲して上外方にのびる口縁部を有し、端部は丸くおさめている。

瓦器

瓦器は、椀と皿が出土している。

瓦器椀（図版11・32-52~56）

(52) は、体部は丸味をもって立ち上がり、口縁部で外反し、端部に沈線を有する。底部には、断面方形に近い高台を付している。(53) は、体部は丸味をもって立ち上がり、口縁部は若干外反し、端部に沈線を有している。底部には、断面方形の高い高台を付している。内面の暗文は、太くて密であり、外面は、上部に間隔のあく暗文を施している。見込みは、格子状暗文である。(54) は、体部はわずかに内彎してのび、口縁部は斜上方にまっすぐのび、端部に沈線を有している。内外面ともにていねいな暗文が施されており、見込みには鋸歯状の暗文が施されている。底部には、断面方形に近い低い高台を付している。

(55・56) は、底部のみの出土である。(55) は底部に断面方形に近い高台を付し、見込みには連結輪状の暗文を施している。(56) は、底部に細い断面三角形の高台を付し、見込みには鋸歯状の暗文を施している。

瓦器皿（図版11・32-57）

底部は、わずかに丸味をもつが平坦であり、体部は外反してのび、内面には鋸歯状の暗文を施している。

細釉陶器

椀（図版11・33-58）

底部の小破片である。器厚7mm。高台は偏平の低い台形をもつ。うす黄緑を呈する。底部内面には、円を描く浅い沈線が見られる。この他に、第1トレンチと第3トレンチから總数9点が出土している。いずれも小破片で図化することは困難である。第3トレンチから出土したものは、皿と思われる。

胎土はそれぞれ白っぽく軟質で、黄緑色のものと濃緑色の釉薬が施されている。

砥石（図版11・31—59・60）

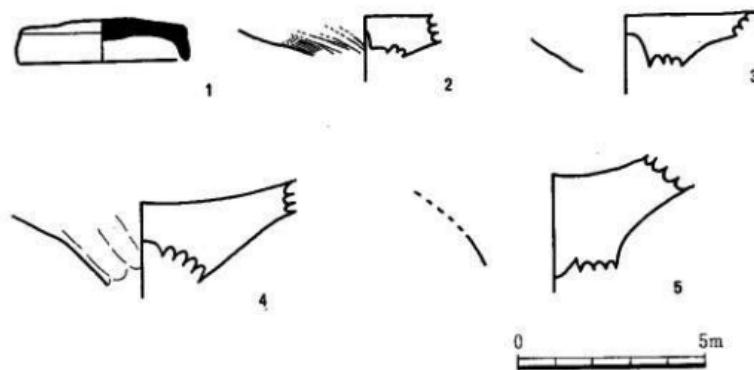
(59) は、貢岩系の石材で白っぽく、四面ともよく使用されている。断面は長方形を呈している。中砥用、(60) は、砂岩系の石材で、断面は、丸に近い菱形を呈しており、四面使用されている。荒砥用。

軒丸瓦（図版9・31—61）

複弁八葉蓮華文と思われる。中房が弁区より一段高くなっているが、破片であるため蓮子は不明である。八葉の複弁はあまり高くない。外区には内縁ではなく、外縁もあり高くない。

軒平瓦（図版9・31—62）

内区は、唐草文を配しており、外区には杏仁形珠文と連珠文を相互に組み合せている。焼成は非常に良く、色調は青灰色である。高宮廃寺跡出土軒平瓦のC類に分類されているものである。



挿図2 出土遺物

V. 遺物観察表

須恵器

種類	図版番号	法 量 (cm)	特 徴	備 考
蓋	6.23 1	口 径 10.8 器 高 5.6 (現存高) 2.2	たちあがりは内傾してのび、端部は凹面をなす。 受部は水平に短かくのび、端部は丸い。 底体部は深く丸い。 マキアゲ、ミズビキ成形	○色調 青灰色 ○胎土 密 ○焼成 良好、堅敏 第1レンチZZ
		受 部 径 13.2 底体部高 3.0	底部外面は回転ヘラ削り調整、底部内面は不整方向のナデ調整、他は回転ナデ調整。	
		器 高 3.6 (現存高) 2.2	受部は水平に短かくのび 端部は丸い。 底部は深く丸い。 マキアゲ、ミズビキ成形	○色調 青灰色 ○胎土 密 ○焼成 良好 第1レンチZZ
	6.23 2	受 部 径 12.3 底体部高 3.0 (現存高) 2.7	底部外面は回転ヘラ削り調整、底部内面は、不整方向のナデ調整、他は回転ナデ調整。	○色調 青灰色 ○胎土 密 ○焼成 良好 第1レンチZZ
		口 径 9.8 器 高 2.9 (現存高) 2.7	たちあがりは内傾してのび、端部はするどい。受部は、上外方にのび端部は丸い。 底部は、やや浅く、丸い。	○色調 灰青色 ○胎土 密 ○焼成 良好、堅敏 外面に自然滑が付着 第2レンチ暗茶褐色砂質土層
		た ちあがり 高 5.0 受 部 径 11.8 底体部高 2.7	底部外面は回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整。	
	6.23 4	口 径 9.4 器 高 3.5 (現存高) 2.9	体部口縁部はほぼ直立し、端部は丸い。 底部はほぼ平ら。 マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面は回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整。	○色調 灰青色 ○胎土 密 ○焼成 良好、堅敏 第2レンチ暗茶褐色砂質土層
		口 径 10.9 器 高 2.9	体部、口縁部は上外方にのび、端部は丸い。底部は平ら。 マキアゲ、ミズビキ成形	○色調 灰青色 ○胎土 密、1mm台の小砂粒を多く含む ○焼成 良好、堅敏 第1レンチ灰色砂質土層
(身)	6.23 6	口 径 10.4 器 高 3.9	底部、口縁部は上外方にのび、端部は丸い。底部はやや丸い。 マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面は回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整。	○色調 暗青灰色 ○胎土 密、1~3mmの砂粒を多く含む。 ○焼成 良好、堅敏 第3レンチ淡黄灰色砂質土層
		口 径 12.8 器 高 4.0 (現存高) 3.9	体部、口縁部は上外方にのび、端部は丸い。底部は平ら。 マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面に回転ヘラ削りを施し、他は回転ナデ調整。	○色調 淡茶褐色 (H)灰色 ○胎土 密 ○焼成 生焼け 第2レンチ青灰砂質土層
	6.24 7	口 径 17.6 器 高 3.9	上外方にのびる体部、口縁部を有し、端部は丸い。底部は平ら。 マキアゲ、ミズビキ成形。回転ナデ調整	○色調 白灰色 ○胎土 密、1mm以下の砂粒を含む ○焼成 不良、軟質 第2レンチ茶褐色灰色土層
		高 台 径 8.8 高 台 高 0.9	底部はやや丸く、底部端にハの字形にひろがる高台を付し、高台は内側で接地する。マキアゲ、ミズビキ成形、底部外面回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整。	○色調 灰青色 ○胎土 密、1mm台の小砂粒を含む ○焼成 良好、堅敏 第2レンチ青灰粘質土層

種類	図版番号	法 量 (cm)	特 殻	備 考
蓋 杯 身	6, 24 10	高 台 径 9.2 高 台 高 0.5	底部端に垂直な高台を付し、高台は外側で接地する。マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面回転ヘラ削り調整。底部内面ナデ調整。他は回転ナデ調整。	○色調 青灰色 ○胎土 密、1mm以下の小砂粒を含む ○焼成 良好、堅緻 第1トレンチ淡黄灰色粘質土層
		高 台 径 10.0 高 台 高 0.5 現存 高 3.2	休部は内寄気味に立ち上がる。平底で底部端よりやや内側に垂直な高台を付し、高台は外側で接地する。マキアゲ、ミズビキ成形。内外面とも回転ナデ調整。	○色調 青灰色 ○胎土 密 ○焼成 良好、堅緻 第1トレンチZZ
		口 径 14.7 器 高 3.4 (現存高)	休部は上外方に立ち上がり端部は丸い。底部端にハの字形に高台を付し高台は内側で接地する。マキアゲ、ミズビキ成形。内外面とも回転ナデ調整。	○色調 灰色 ○胎土 密 ○焼成 良好、堅緻 第1トレンチ灰褐色砂質土層
	6, 24 12	高 台 径 11.8 高 台 高 0.4	休部、口縁部は内寄気味に上外方にのび、端部は丸い。平底で底部端内側にハの字形に高台を付す。高台は内側で接地する。マキアゲ、ミズビキ成形。底部の $\frac{1}{10}$ に回転ヘラ削りを施し他は回転ナデ調整。	○色調 青灰色 ○胎土 密、1mm以下の小砂粒を含む ○焼成 良好、堅緻 第1トレンチ灰褐色砂質土層
		口 径 16.2 器 高 3.8 (現存高)	休部、口縁部は内寄気味に上外方にのび、端部は丸い。平底で底部端内側にハの字形に高台を付す。高台は内側で接地する。マキアゲ、ミズビキ成形。底部の $\frac{1}{10}$ に回転ヘラ削りを施し他は回転ナデ調整。	○色調 青灰色 ○胎土 密、1mm以下の小砂粒を含む ○焼成 良好、堅緻 第1トレンチ灰褐色砂質土層
		高 台 径 11.8 高 台 高 0.6	休部、口縁部は内寄気味に上外方にのび、端部は丸い。平底で底部端内側にハの字形に高台を付す。高台は内側で接地する。マキアゲ、ミズビキ成形。底部の $\frac{1}{10}$ に回転ヘラ削りを施し他は回転ナデ調整。	○色調 灰色 ○胎土 密 ○焼成 良好、堅緻 底部内面に自然釉付着 第3トレンチ暗茶褐色砂質土層
	6, 24 14	高 台 径 8.4 高 台 高 1.2	高めの高台を底部端より内側にハの字形に付す。高台端は丸い。マキアゲ、ミズビキ成形、底部内面回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整。	○色調 灰色 ○胎土 密 ○焼成 良好、堅緻 底部内面に自然釉付着 第3トレンチ暗茶褐色砂質土層
		高 台 径 13.0 高 台 高 0.5 現存 高 5.8	底部端に垂直な高台を付し、端部は平面を有す。マキアゲ、ミズビキ成形、底部外面回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整。	○色調 青灰色 ○胎土 密、1mm以下の小砂粒を含む ○焼成 良好、堅緻 第2トレンチ青灰粘質土層
		口 径 10.4 器 高 3.6 16	口縁部はほぼ直面に下り端部は丸い。天井部は高く丸味をもつ。マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外側 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	○色調 灰青色 ○胎土 密、1~2mmの小砂粒を含む ○焼成 良好、堅緻 第2トレンチ茶褐色灰土層
蓋 杯 蓋	7, 25 17	口 径 10.4 器 高 3.6	下外方にのびる口縁部を有し、端部は丸い、天井部はほぼ平ら。マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外側 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整。	○色調 青灰色 ○胎土 密、1mm以下の小砂粒を含む ○焼成 良好、堅緻 第2トレンチ暗灰色粘質土層
		口 径 13.4 器 高 1.1 (現存高)	口縁部は近く下外方に下り端部は丸い。天井部 $\frac{1}{2}$ はほぼ平らで、それから外して近く下り、屈曲して下外方にのび、さらに屈曲して外方にのびる。マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外側 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整。	○色調 灰色 ○胎土 密 ○焼成 生焼け 第1トレンチ灰色砂質土層
	7, 25 18	口 径 14.4 器 高 1.5 (現存高)	口縁部は下外方に下り端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は丸い。天井部は平らに近い。マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外側 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整。	○色調 青灰色 ○胎土 密、1mm以下の小砂粒を多く含む ○焼成 良好、堅緻 第3トレンチ暗茶褐色砂質土層
		口 径 14.4 器 高 1.5 (現存高)	口縁部は下外方に下り端部は丸く、内傾するかえりを有し、かえり端部は丸い。天井部は平らに近い。マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外側 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整。	○色調 青灰色 ○胎土 密、1mm以下の小砂粒を多く含む ○焼成 良好、堅緻 第3トレンチ暗茶褐色砂質土層

種類	図版番号	法 量 (cm)	特 徴	備 考
蓋 杯 (蓋)	7.25	口 径 12.2 器 高 0.7 (現存高)	口縁部は短く外反して下り、端部は丸い。天井部はほぼ平らだが、中央部はやや凹み加減である。それから丸く屈曲し、外反して下ったのち口縁部近くで上方方に短くのびる。マキアゲ、ミズビキ成形。天井部回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整。	○色調 灰色 ○胎土 密 ○焼成 良好、堅緻 口縁内外面に自然釉が付着 内面全体にススが付着 第1トレンチ暗灰色粘質土層
	20			
	7.25 21	口 径 11.4 器 高 2.5 (現存高)	口縁部は直立し、端部は外傾する平面を有す。天井部は低く平ら。マキアゲ、ミズビキ成形。回転ナデ調整。	○色調 吉灰綠色 ○胎土 密 ○焼成 良好、堅緻 第1トレンチ黄茶褐色灰色土層
長 頸 壺	7.26	高 台 径 11.6 高 台 高 1.5 現 存 高 4.3	底部端にハの字形にひろがる高台を付し端部は平面を有す。底部はやや丸い。 マキアゲ、ミズビキ成形。底部内面、不整方向のナデ調整、他は回転ナデ調整。	○色調 吉灰色 ○胎土 密 ○焼成 良好、堅緻 第1トレンチ茶褐色灰色土層
	22			
頸 壺 壺	7.26	体部最大径 16.1 器 高 14.9 (現存高)	肩部は下方方に張り丸く体部をなす。体部と底部の境に外弯気味に下方方に開く高い高台が付され高台は内側で接地する。底部は平ら、マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面、回転ヘラ削り調整。体部は回転ナデ調整、高台付ハリツケ	○色調 淡灰青色(n)灰青色 ○胎土 密 ○焼成 良好、堅緻 外面及び底部内面に自然釉が付着 第3トレンチ淡黃色硬質土層
	23	高 台 径 10.6 高 台 高 2.6		
	7.26 24	口 径 12.4 器 高 3.2 (現存高)	口頭部は外弯して外傾し端部は丸い。 マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	○色調 灰青色 ○胎土 売 ○焼成 良質、堅緻 内面に自然釉付着 第1トレンチ淡茶褐色砂質土層
壺 壺	7.26	残 存 高 8.5	口頭部はほぼ直立に立ち上がる。 口頭部に1条の沈線を有す。 マキアゲ、ミズビキ成形 回転ナデ調整	○色調 灰青色 ○胎土 売、1mmの小砂粒を含む ○焼成 良好、堅緻、自然釉が付着 第1トレンチ淡黃色砂質土層
	25			
壺 壺	7.26	残 存 高 7.7	口頭部は外弯気味に外傾する。肩部は口頭部と110°に開く。マキアゲ、ミズビキ成形。回転ナデ調整、口頭部はハリツケ。	○色調 淡茶褐色 ○胎土 密 ○焼成 良好、堅緻 第2トレンチ吉灰粘土層
	26			
壺 壺	7.27	残 存 高 9.6	口頭部は、外弯気味に外傾する。口頭部に3条の沈線を有す。マキアゲ、ミズビキ成形。回転ナデ調整	○色調 灰青色 ○胎土 密、1mmの小砂粒を含む ○焼成 良好、堅緻、自然釉が付着 第1トレンチ淡黃色砂質土層
	27			
甕	8.27	口 径 23.6 器 高 5.6 (現存高)	口頭部は外弯して外傾し口縁部で上方へ屈曲し肥厚させてる。 端部はまるい。 マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	○色調 青灰色 胎土 密、1~2mmの砂粒を含む 燒成 良好、堅緻 第1トレンチ茶褐色灰色土層
	30			
甕	8	口 径 48.4 器 高 5.9 (現存高)	口頭部は上方にのび、端部は平直である。 マキアゲ、ミズビキ成形。回転ナデ調整。	○色調 灰青色 胎土 密、1~2mmの砂粒を含む 燒成 良好、堅緻 第1トレンチ 茶褐色灰色土層
	32			

種類	同版番号	法 番 (cm)	特 質	備 考
瓶 子	9.27	器 高 5.1 (現存高)	体部は上外方にのび、底部近くでやや外部寄る。 底部は厚く平ら。上部は欠損の為不明。マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面、糸切り未調整、他は回転ナデ調整。	色調 (内) 青灰色 (外) 青灰色 胎土 密 焼成 良好、堅緻 底部 内面に自然釉が付着 第1トレンチ淡黄灰色砂質土層
	33			

土 師 器

種類	同版番号	法 番 (cm)	特 質	備 考
甕	8.27	口 径 15.4 器 高 5.2 (現存高)	外反して立ち上がった口縁部、端部は外傾する凹面を有し内部面へわずかに肥厚する。 口縁部内外面及び肩部内部は横ナデ調整、肩部外面は斜方向の刷毛目。	色調 淡黄褐色 胎土 良質、1mm台の小砂粒を含む 焼成 良好 第1トレンチ暗青灰色粘質土層
	28	口 径 20.0 器 高 10.2 (現存高)	口縁部は外反して立ち上がった後屈して斜上方にのびる、端部は水平な平坦面を作り、外へわずかに肥厚する。 口縁部内外面は横ナデ調整を施し肩部外面には横方向の刷毛目が残る。	色調 淡灰黃白色 (外) 淡褐色 胎土 良質、1~3mmの小砂粒を多く含む 焼成 良好 第1トレンチ青灰粘質土層
甕	8.28	口 径 19.2 器 高 5.6 (現存高)	口縁部は直線気味に上方にのび、端部は外傾する平坦面を有す。 口縁部内外面とも横ナデ調整、他はナデ調整。	色調 淡褐色 胎土 良質、雲母を含む 焼成 良好 第1トレンチ非戸状造構
	31	口 径 11.6 器 高 5.9 (現存高)	「く」の字形に屈曲し、上外方にのびる口縁部、端部は丸い。 口縁部外面には横ナデ調整を施し肩部外面には継方向の刷毛目、肩部内部には横方向の刷毛目が残る。	色調 淡茶褐色 胎土 良質 焼成 良好 口縁部から肩部にかけて外面にススが付着 第2トレンチ黒色粘質土層
甕	9.28	口 径 13.6 器 高 7.6 (現存高)	「く」の字形に屈曲し、上外方にのびる口縁部、端部は内傾する平坦面を有す。 口縁部外面は横ナデ調整を施し口縁部内部は横ナデ調整及び横方向の刷毛目、肩部外面上方は乱方向の刷毛目、その下は、斜方向の刷毛目。肩部内部には指頭圧痕が多く残る。	色調 茶褐色 胎土 良質、1~2mmの小砂粒を多く含む。また、雲母が多く混じる。 焼成 良好 口縁部と肩部の外面にススが付着 第2トレンチ暗褐色砂質土層
	35			
甕	9.29	口 径 28.6 器 高 18.0 (現存高)	口縁部は若干内傾して立ち上がり、端部は平坦面をなす。 口縁部外面は横ナデ調整、体部外面には横方向の刷毛目、体部内部には横方向のヘラ刷り、指頭圧痕も残る。肩部外面にヘラ压痕文 山陰系 (?)	色調 (外) 暗茶褐色 (内) 茶褐色 胎土 粗砂を含む。堅い。 焼成 良好 第2トレンチ黑色粘質土層
	36			

種類	図版番号	法量(cm)	特徴	備考
高 杯	10.29 37		中空の脚柱部は大きく角度を変えて外反し基部に移行する。	色調 淡明褐色 胎土 良質 焼成 良好 第1トレンチ ZZ
	10.29 38		中空の脚柱部のみ残存。	色調 暗褐色 胎土 1mm以下の小砂粒を多く含む。 焼成 良好 第1トレンチ 暗青灰色砂質土層
	10.29 39		中空の脚柱部のみ残存。 内面にしぶり痕がみられる。	色調 淡黄褐色 胎土 良質 焼成 良好 第1トレンチ暗青灰色砂質土層
	10.29 40		中空の脚柱部のみ残存。	色調 淡褐色 胎土 0.5mm以下の小砂粒を多く含む。 焼成 不良 第2トレンチ青灰砂質土層
	10.29 41		中空の脚柱部のみ残存。	色調 淡褐色 胎土 良質 焼成 良好 第2トレンチ暗褐色砂質土層
	10.29 42		中空の脚柱部のみ残存	色調 淡黄褐色 胎土 良質 焼成 不良 第3トレンチ暗青灰色粘質土層
	10.30 43		杯部底部と中空の脚柱部のみ残存 脚柱部内面にはしぶり痕がみられる。	色調 淡明褐色 胎土 良質、1mm位の小砂粒を含む 焼成 良好 第2トレンチ暗茶褐色砂質土層
	10.30 44	脚部高 10.4 現存高 7.2	中空の脚柱部はなだらかに基部へ移行する。 端部は丸い。	色調 明褐色 胎土 良好 第3トレンチ暗茶褐色砂質土層
	10.30 45		中実の脚柱部を持ち、なだらかに基部へ移行する。基部に移行する部分に径1cm程度の凹孔を三方に穿つ。	色調 明褐色 胎土 良質 焼成 良好 第2トレンチ暗褐色砂質土層
皿	10.30 46	口 径 17.2 器 高 2.5	平坦な底部、体部は内寄気味に立ち上がり、端部は丸い。底部外面に指頭圧痕が残る。内外面ともナデ調整	色調 淡黄褐色 胎土 良質、1mm以下の小砂粒を多く含む。 焼成 良好 第1トレンチ灰色砂質土層
	10.30 47	口 径 9.2 器 高 1.7	平坦な底部、体部はやや内寄気味に立ち上がり端部は丸い。 内外面ともナデ調整。	色調 淡褐色 胎土 良質 焼成 良好 第2トレンチ暗茶褐色灰色土層
	10.31 48	口 径 16.0 器 高 3.3 (現存高)	丸味をもった底部、体部は内寄気味に立ち上がり端部は丸い。 内外面ともナデ調整。	色調 白黄褐色 胎土 良質 焼成 良好 第1トレンチ灰色砂質土層

種類	図版番号	法量(cm)	特徴	備考
皿	10.31	口径 18.0 器高 2.5 (現存高)	体部は内穹気味に立ち上がり、縫部は丸い。底部外面に指頭圧痕が残る。内外面ともナデ調整。	色調 灰黄褐色 胎土 良質 焼成 良好 第2トレンチ暗青灰色粘質土層
	49			
杯	10.31	口径 12.8 器高 4.4 (現存高)	上外方に立ち上がった口縁部は屈曲し外反してのびる。口縁端部は丸い。体部内外面は不整方向のナデ、体部から口縁部の内外面は横ナデ調整、体部外面には指頭圧痕が多く残る。	色調 淡黄褐色 胎土 良質、0.1~3mm以下の小砂粒を含む。 焼成 良好 第1トレンチ暗青灰色粘質土層
	50			
壺	10	口径 12.2 器高 5.6 (現存高)	外反して立ち上がった後、屈曲して上外方にのびる。口縁部、屈曲部は凸巣状の棱を作る。端部は丸い。調整は風化のため不明。	色調 灰黄褐色 胎土 1mm台の小砂粒を多く含む。 焼成 故 第2トレンチ黒色粘質土層
	51			

瓦 器

種類	図版番号	法量(cm)	特徴	備考
碗	11.32	口径 14.2 器高 6.0 高台径 6.7 高台高 0.9	体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部で若干外反する。口縁部に沈線。内外面の暗文は風化がはげしく不明。断面方形に近い高台を付ける。	色調 灰黒色 胎土 精良 第1トレンチ淡黄灰色砂質土層
	52			
碗	11.32	口径 16.0 器高 7.9 高台径 7.9 高台高 0.6	体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は若干外反する。内部の暗文は太くて密、外面は上部に間隔のあるあく暗文。底部内面に格子状暗文、口縁端部に沈線、断面方形に近い高台を付ける。	色調 黑灰色 胎土 灰白色、精良 第1トレンチ灰色砂質土層
	53			
碗	11.32	口径 15.3 器高 5.7 高台径 6.4 高台高 0.7	体部はわざかに内凹してのび、口縁部は斜上方にまっすぐのびる。口縁部に沈線、内外面はていねいに暗文が施されている。見込みは鋸歯状の暗文で底部には断面方形の分厚い高台を付ける。	色調 黑灰色 胎土 灰白色、精良 第1トレンチ淡黄灰色砂質土層
	54			
皿	11.32	高台径 5.2 高台高 0.7	底部のみで断面方形に近い高台を付ける。 底部内面に連絡輪状の暗文	色調 黑灰色 胎土 灰白色、精良 第1トレンチ灰白色砂質土層
	55			
皿	11.32	高台径 5.9 高台高 0.7	底部のみで断面三角形の細い高台が付く。 底部内面に鋸歯状の暗文	色調 黑灰色 胎土 灰白色、精良 第1トレンチ灰色砂質土層
	56			
皿	11.32	口径 10.3 器高 10.3 (現存高)	底部はわざかに丸みをもつが平坦、体部は外反してのび、端部は丸い。内面底部は鋸歯状の暗文を施すが、風化の為、明瞭でない。体部内外面は横ナデ、他はナデ調整	色調 黑灰色 胎土 灰白色、精良 第2トレンチ溝1
	57			

縄 索 陶 器

種類	図版番号	法量(cm)	特徴	備考
縄索 陶器	11.33		高台は偏平の低い台形を呈している。底部内面には、円を描く浅い沈線を有する。	色調 黄緑色 胎土 白っぽく軟質 焼成 良好 第3トレンチ暗褐色砂質土層
	58			

砾 石

種類	図版番号	法 量 (cm)	特 徴	備 考
砾 石	11.31 59	(残存値) 最大長 6.0 最大幅 6.0	断面長方形。四面とも著しく使用されている。 中砾。	黄岩系
		11.31 60	(残存値) 最大長 8.5 最大幅 5.5	断面は円形に近く菱形を呈している。 四面を使用している。 荒砾
高	捕2・33 2	口 径 4.4 器 高 0.6	口縁部は直立気味で、端部は丸い。 天井部は低くほぼ平ら。マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外側 ² 回転ヘラ削り調整。他は同軸ナデ調整	色調 淡青色 胎土 密、1mm位の小砂粒を含む。 焼成 良好、堅敏 第2トレンチ暗茶褐色砂質土層
		捕2・33 3	杯部、底部のみ残存、外面にたて方向の刷毛目	色調 淡黄褐色 胎土 良質、1mm位の小砂粒を多く含む。 焼成 良好 第1トレンチZ Z
杯	捕2・33 4		杯部底部のみ残存	色調 淡黄褐色 胎土 良質、1mm位の小砂粒を多く含む。 焼成 不良 第2トレンチ黒色粘質土層
		捕2・33 5	杯部底部のみ残存	色調 明褐色 胎土 良質、1mm位の小砂粒を多く含む。 焼成 良好 第2トレンチ黑色粘質土層

須恵器、土師器

種類	図版番号	法 量 (cm)	特 徴	備 考
蓋	捕2・33 1	口 径 4.4 器 高 0.6	口縁部は直立気味で、端部は丸い。 天井部は低くほぼ平ら。マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外側 ² 回転ヘラ削り調整。他は同軸ナデ調整	色調 淡青色 胎土 密、1mm位の小砂粒を含む。 焼成 良好、堅敏 第2トレンチ暗茶褐色砂質土層
		捕2・33 2	杯部、底部のみ残存、外面にたて方向の刷毛目	色調 淡黄褐色 胎土 良質、1mm位の小砂粒を多く含む。 焼成 良好 第1トレンチZ Z
高	捕2・33 3		杯部底部のみ残存	色調 淡黄褐色 胎土 良質、1mm位の小砂粒を多く含む。 焼成 不良 第2トレンチ黒色粘質土層
		捕2・33 4	杯部底部のみ残存	色調 明褐色 胎土 良質、1mm位の小砂粒を多く含む。 焼成 良好 第2トレンチ黑色粘質土層
杯	捕2・33 5		杯部底部のみ残存	色調 白黄褐色 胎土 1mm位の小砂粒を多く含む。 焼成 不良 第1トレンチ暗青灰色砂質土層

VI まとめ

今回実施した調査地は、北から南へゆるやかに傾斜する東西二つの尾根に挟まれた谷間地形で、現状で東西両尾根との比較差は、約2～5mを測る。東の尾根は、史跡高宮廃寺跡指定地であり、西の尾根では、巨大な柱穴をもつ掘立柱建物跡群と竪穴式住居跡で形成された古代氏族の住居地が発見されている。

今回の調査は、高宮廃寺跡関連遺構の確認と、高宮廃寺を氏寺とし、延喜式内社大社御祖神社及び高宮神社を氏神とする古代氏族の氏寺造営地と居住地との関連を調査し、今後の保存対策を講じる必要から実施したものである。

高宮廃寺跡の主要伽藍の規模等については、昭和54年に実施した高宮廃寺跡範囲確認調査によりほぼ明らかになってきているが、築地等を含む寺域全体の規模等についてはまだ未解明な部分が残されている。

しかし、過去数次に亘って丘陵頂部付近で実施してきた発掘調査においてその都度興味深い成果を上げてきている。この高宮の丘陵と丘陵端部に広がる地において、古代氏族によって形成された巨大な掘りかたの柱穴をもつ掘立柱建物跡を中心とする古代の集落の姿が徐々に明らかになりつつあり、この地に居住した氏族により白鳳時代初めに高宮廃寺が創建され、氏寺を造営するためにその居住地を氏寺氏神並立の地として提供したことも判明してきている。さらに集落形成時及び寺院造営時には、その地にあった小谷を埋めて平坦に整地するという古代における土木事業の跡も発見され、それら版築された土層内から円筒埴輪片等が出土しておりこの地に古墳の存在の可能性を示唆している。

今回の調査の第1トレント、第2トレントで検出した石組遺構は、全休の規模等不明な点が多いが、遺存状況の良い第1トレント西端の石組を観察すると、約20cmから人頭大的花崗岩が4～6段構築され、高さは約50cmを測る。その石組の傾斜角度は、約40度である。

第1トレント、第2トレントのそれぞれ東端で検出している石組は、その遺存状況は悪くかなり崩れしており、その構築状況は不明であるが、散乱している花崗岩は第1トレント西端の石組と同程度の大きさのものである。

一部残りの良い部分での石組の状況は、西側と同じ組みかたで石が積まれている。

この石組遺構は、谷間地形に添って南北方向に配列されており、その石組遺構の東西の幅は、上端で約6.5m、下端で約5mを測ることができるが、南北方向については不明である。このような石組遺構は、東大阪市西石切町所在の西ノ辻遺跡の第15次・16次調査において、約5m×5m～約6m×1.2mで深さ約1mの規模のものが、4基木樋管

で連なって発見されている。

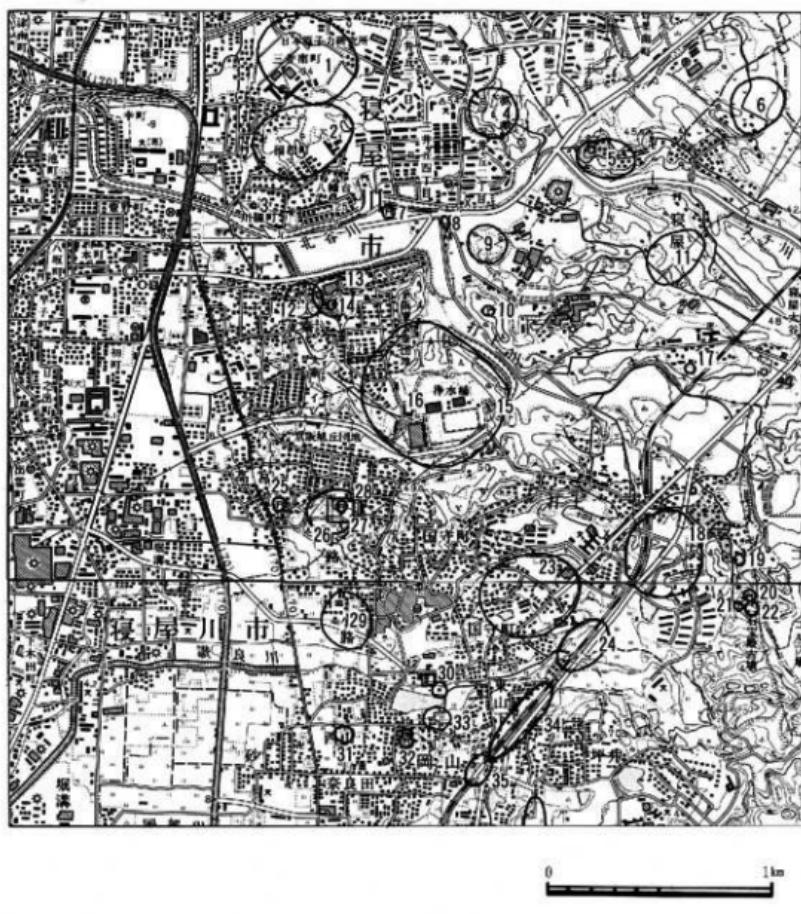
高宮で発見された石組造構は、類似する東大阪市西ノ辻遺跡の例や、地形等の立地條件から推察すると、谷間を利用した貯水池的な水利施設と考えられる。

過去数次に亘って実施した丘陵頂部での調査では、井戸等の水利施設の発見はまったくなく、丘陵端部において7世紀の井戸2基と、12世紀中葉の井戸が1基発見されているにすぎない。

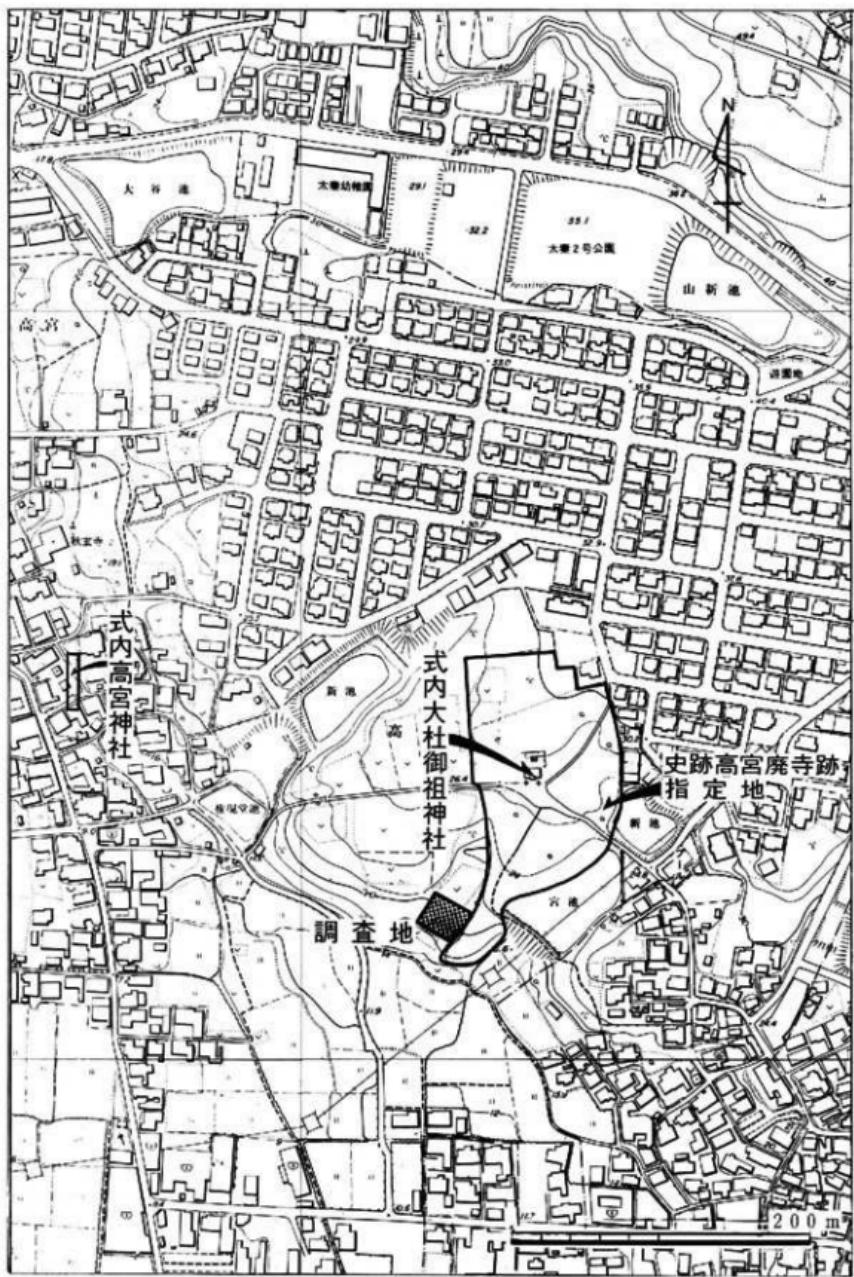
この石組造構は、その出土遺物及び断面観察から、8世紀末頃には使用されなくなっていると推察される。このことは、高宮の丘を中心として形成された古代氏族の集落の営みとも密接な関係をもち、古代の水利施設を考える上において今後の検討課題になるとともに新たな資料を提供するものであり、従来あまり調査されることのなかった谷間地形での調査の必要性を痛感するものである。

以上現段階で判明している範囲で、今回実施した調査での遺跡のもつ性格等を記してまとめてみたい。

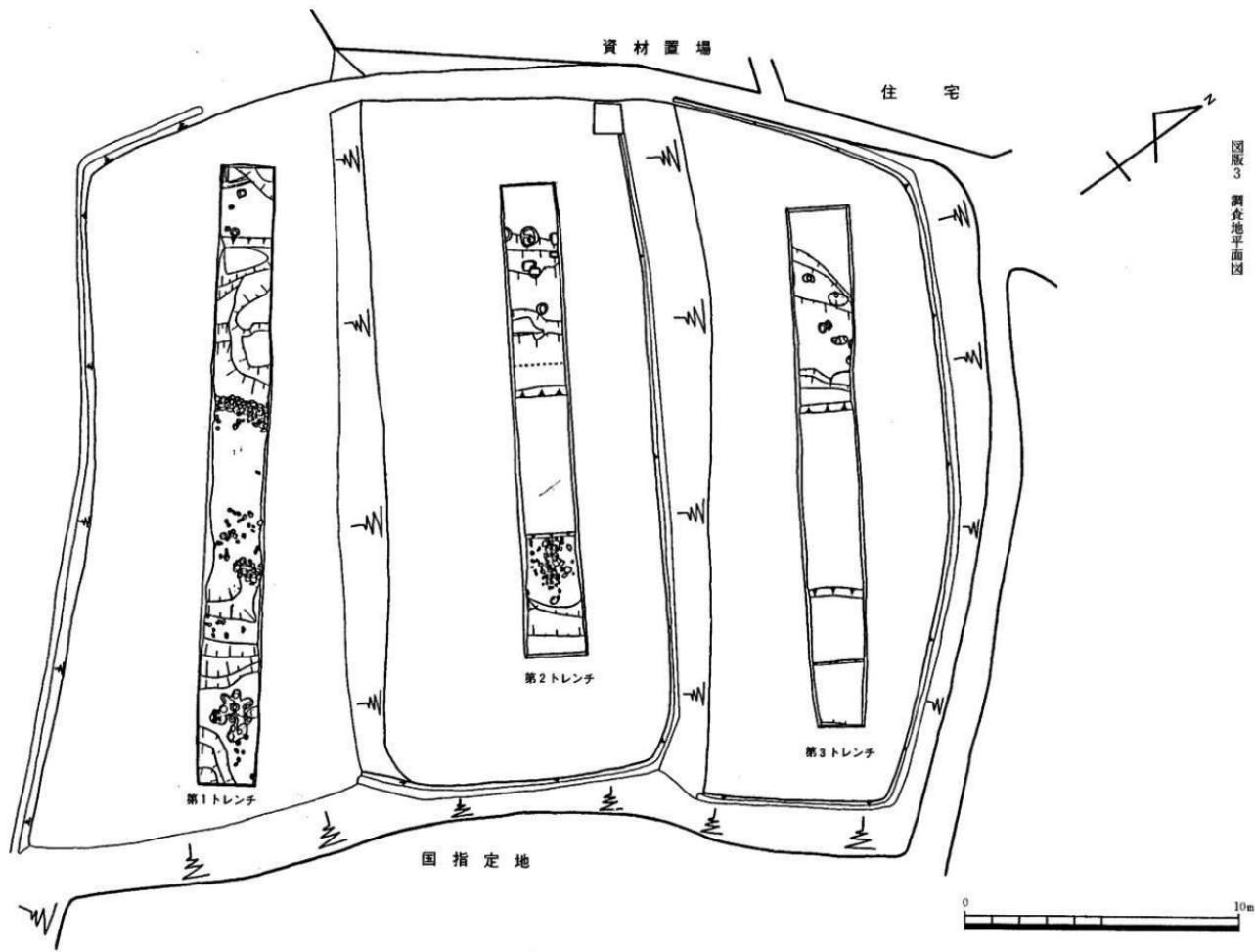
図 版

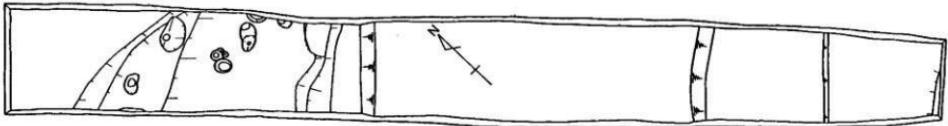


- | | | | | |
|-------------------|-------------------------|---------------------|-------------------|--------------------|
| 1. 三井南遺跡 | 2. 秦山遺跡 | 3. 秦河勝の墓 | 4. 池の瀬遺跡 | 5. 寝屋遺跡 |
| 6. 寝屋東遺跡 | 7. 延喜式社内細屋 | 8. 龍シ塚古墳 | 9. 太秦北遺跡 | 10. 太秦1号墳 |
| 11. 寝屋南遺跡 | 12. 神宮寺跡 | 13. 太秦廢寺跡 | 14. 動物ハニワ
出土地 | 15. 太秦古墳群 |
| 16. トノ山(高塚)
古墳 | 17. 寝屋古墳 | 18. 打上遺跡 | 19. 雷神石
(石棺の身) | 20. 高良(打上)神社 |
| 21. 打上神社
古墳群 | 22. 石の宝殿古墳
(史跡) | 23. 国守西遺跡 | 24. 國守遺跡 | 25. 延喜式内社
高宮神社 |
| 26. 高宮遺跡 | 27. 高宮廢寺跡
(史跡) | 28. 延喜式内社
大社御祖神社 | 29. 小路遺跡 | 30. 更良川遺跡・
誠良寺跡 |
| 31. 北口遺跡 | 32. 忍ケ岡古墳・延
喜式内社忍良神社 | 33. 更良岡山
古墳群 | 34. 坪井遺跡 | 35. 忍ケ丘駅前遺跡 |

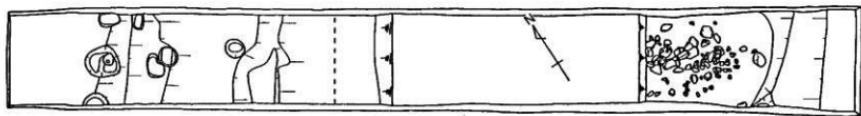


図版3 濃糞地平面図



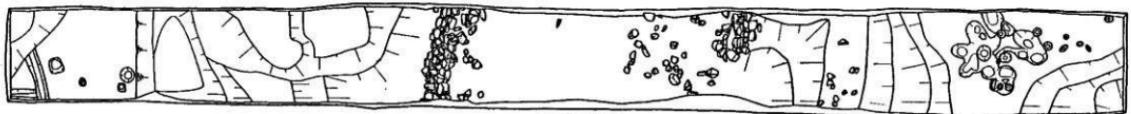


第3トレンチ



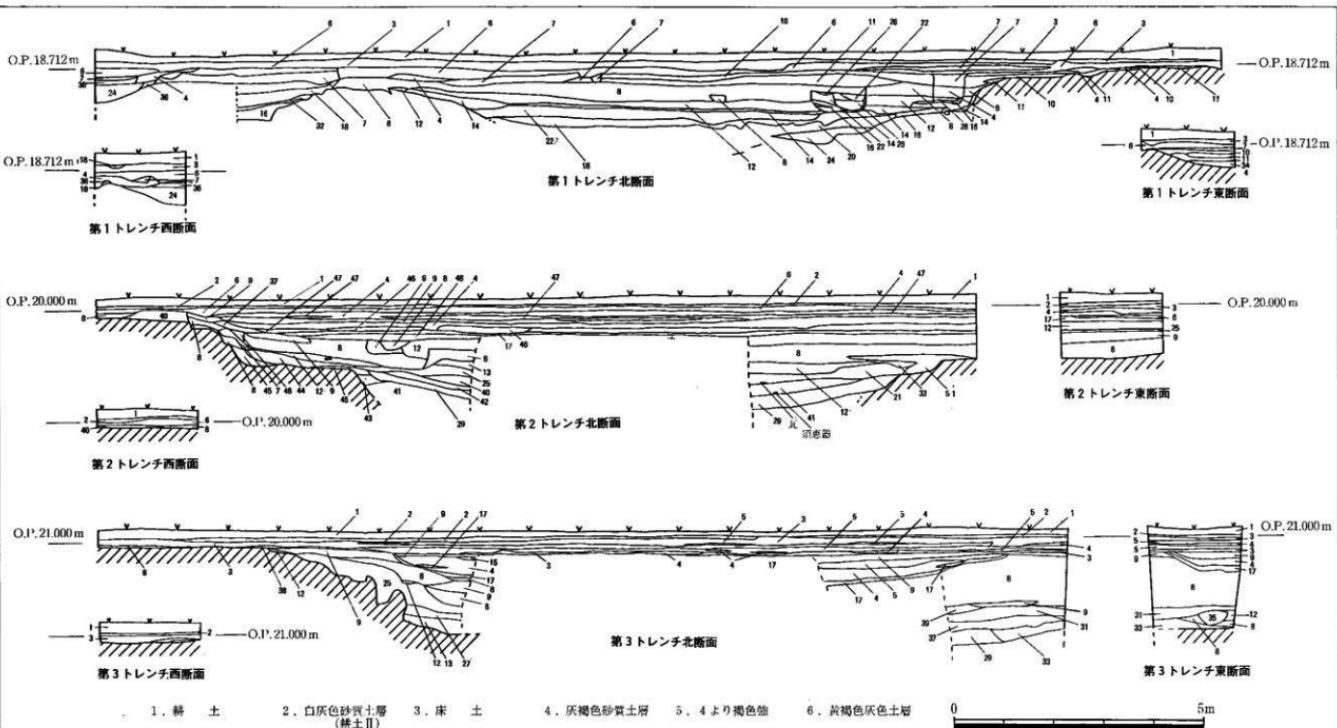
第2トレンチ

石組み遺構



第1トレンチ

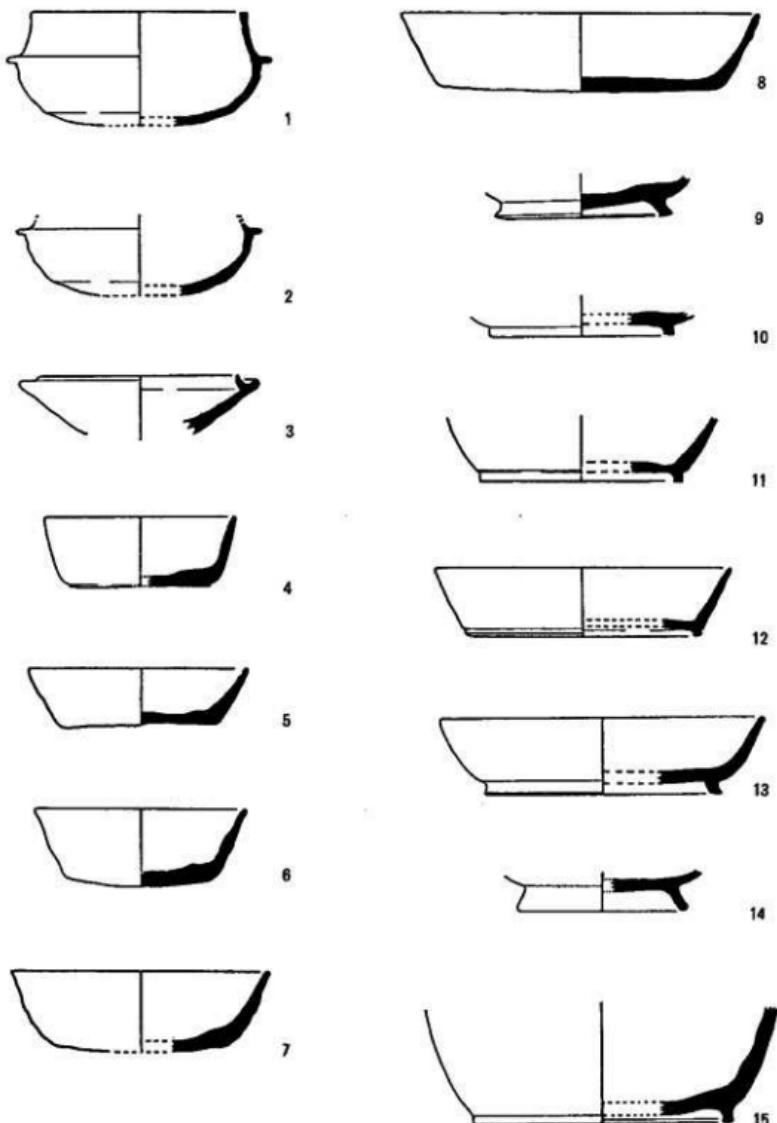
0 5 m



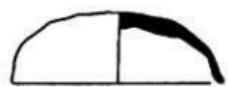
- | | | | | | |
|-----------------|---------------------|--------------------|--------------|--------------------|----------------|
| 1. 耕土 | 2. 白灰色砂質土層
(耕土Ⅱ) | 3. 床土 | 4. 灰褐色砂質土層 | 5. 4より褐色強 | 6. 黄褐色灰色土層 |
| 7. 茶褐色灰色土層 | 8. 喙茶褐色砂質土層 | 9. 8の鉄分まじり | 10. 黄褐色灰色土層 | 11. 茶褐色灰色土層
(下) | 12. 淡茶褐色砂質土層 |
| 13. 青灰砂質土層 | 14. 淡青灰色砂質土層 | 15. 4の鉄分まじり | 16. 青灰粘質土層 | 17. 黄色砂質土層 | 18. 灰色砂質土層 |
| 19. 12の鉄分まじり | 20. 淡青灰色砂質土層 | 21. 喙灰褐色砂質土層 | 22. 紫灰色砂質土層 | 23. 青茶褐色砂質土層 | 24. 淡青灰色粘質土層 |
| 25. 7に青みかかっている | 26. 白色砂層 | 27. 25に黄みかかっている | 28. 白灰色砂層 | 29. 黑色粘質土層 | 30. 28よりも灰茶色が強 |
| 31. 9よりも褐色強 | 32. 22よりも褐色強 | 33. 灰色砂層 | 34. 11よりも茶色強 | 35. 灰褐色砂層 | 36. 4よりも褐色強 |
| 37. 黄褐色砂質土層 | 38. 黄褐色粘質土層 | 39. 9よりも黄色強 | 40. 黄色粘質土層 | 41. 喙灰粘質土層 | 42. 41よりも黑色強 |
| 43. 42に灰色粘質土まじり | 44. 13よりやや黑色強 | 45. 41に灰色及び黄色粘土まじり | 46. 灰黃褐色砂質土層 | 47. 46よりやや黄色強 | 48. 46よりさらに黄色強 |
| 49. 9より褐色強 | 50. 35より灰褐色 | 51. 灰褐色粘質土層 | | | |

0 5m

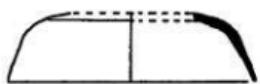
圖版 6 出土遺物実測図



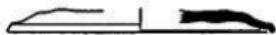
0 10cm



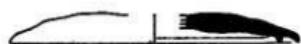
16



17



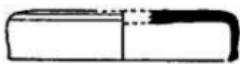
18



19



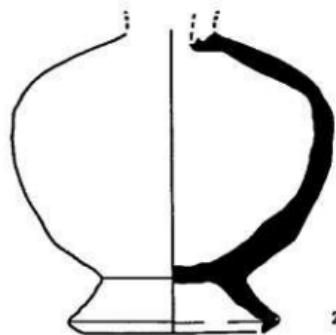
20



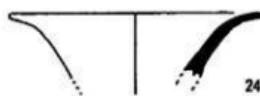
21



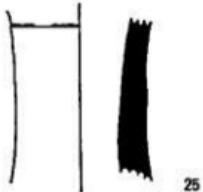
22



23



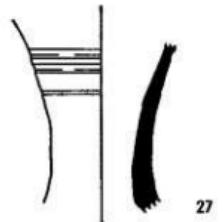
24



25

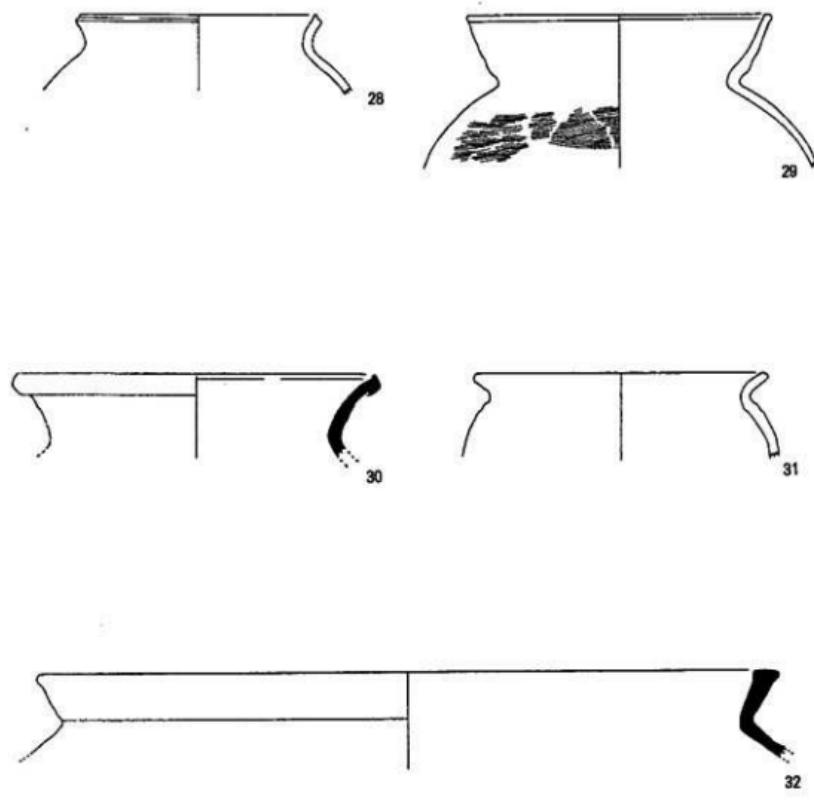


26



27





0 10cm



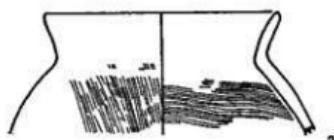
33



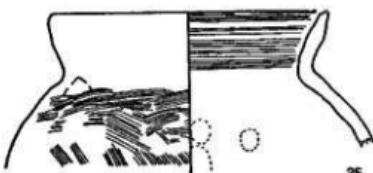
61



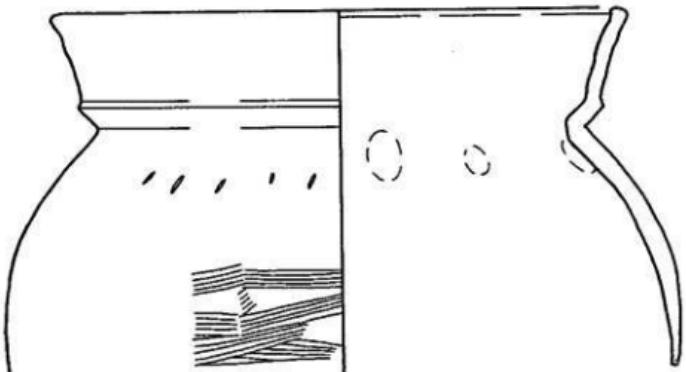
62



34



35



36

0 10cm



37



38



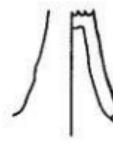
39



40



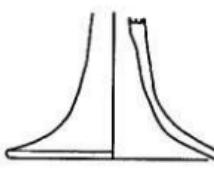
41



42



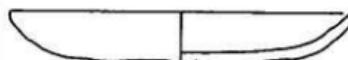
43



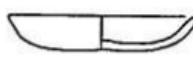
44



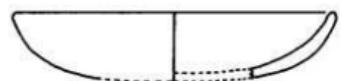
45



46



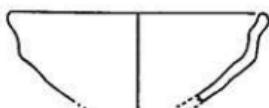
47



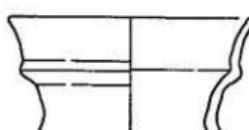
48



49

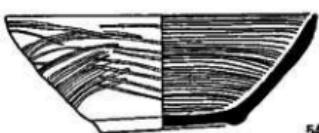
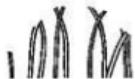
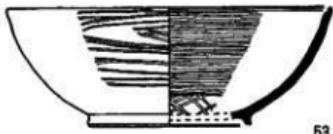
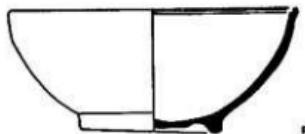


50

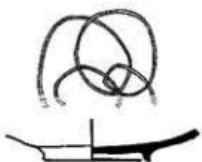


51

0 10cm



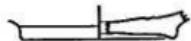
54



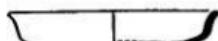
55



56



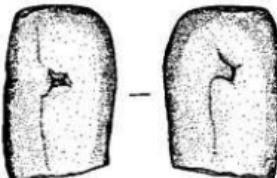
58



57

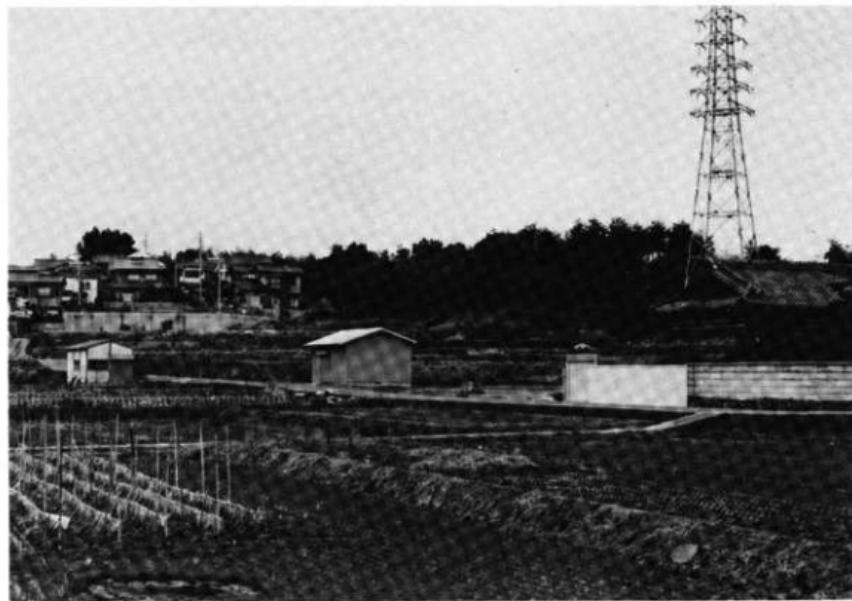
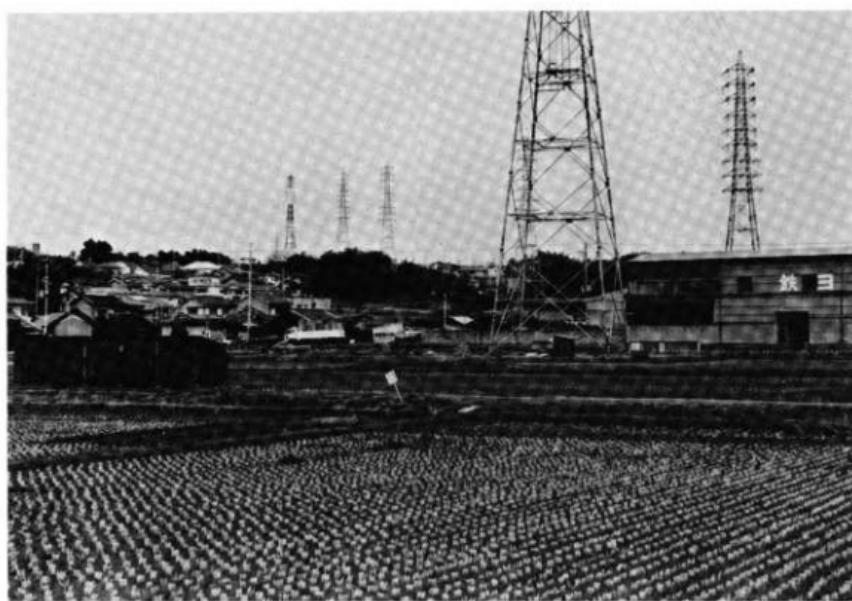


59



60

0 10cm





右の森は高宮廃寺跡





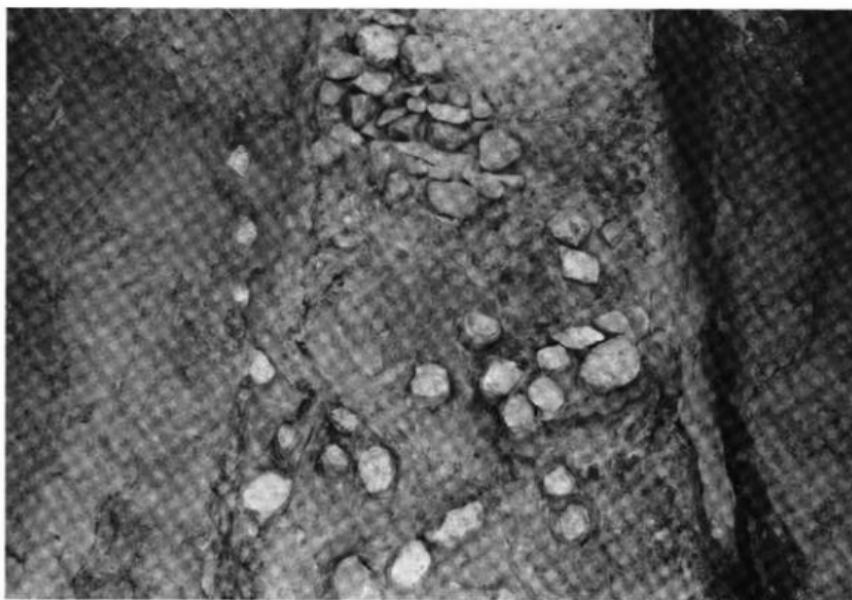
西より



東より



西側石組(東より)



東側石組(西より)



石組遺構(東より)



西側石組検出状況



甕出土状況



瓦器碗出土状況



東より



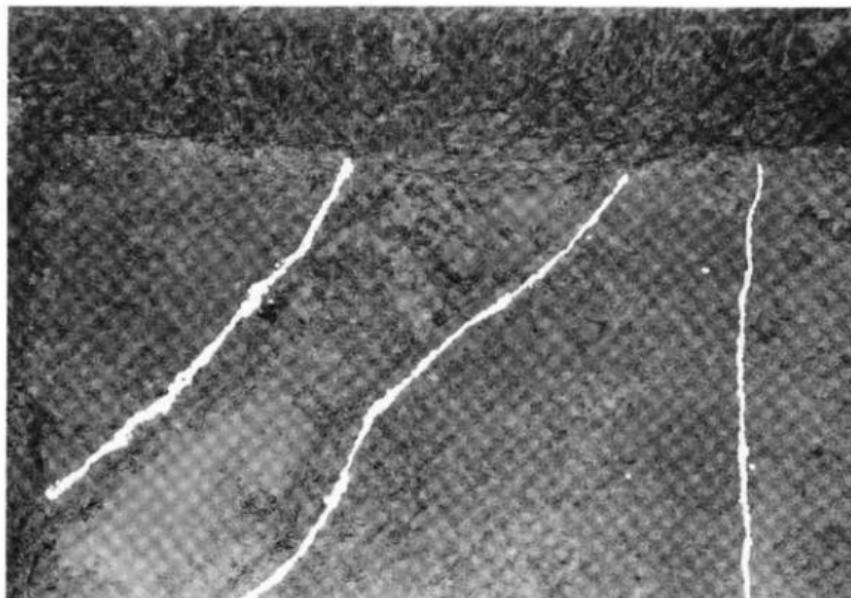
西より



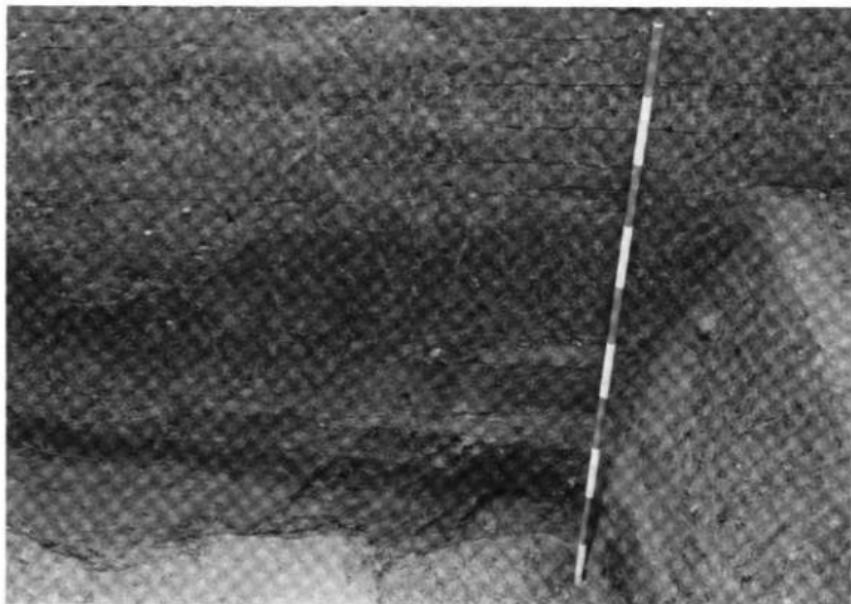
東より



北より



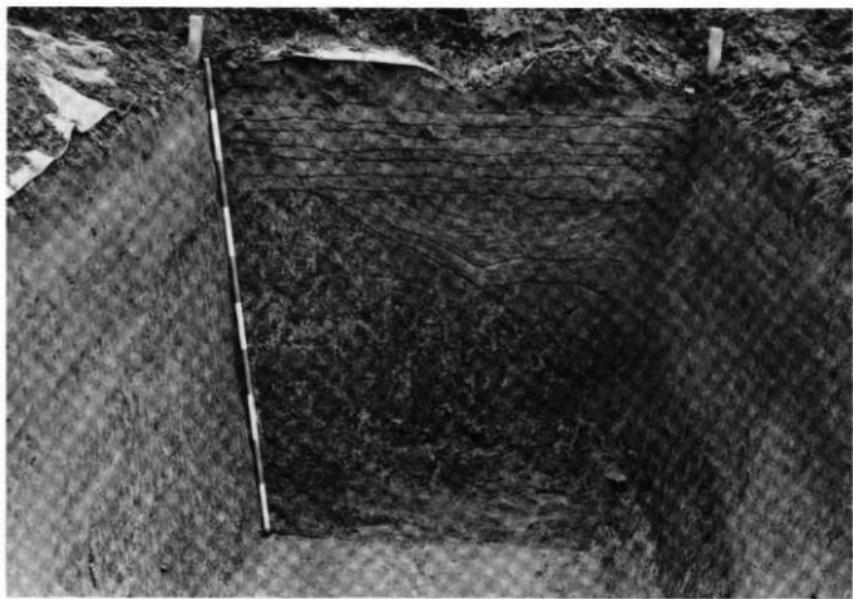
中層検出溝状遺構



トレンチ中央付近断面(南より)



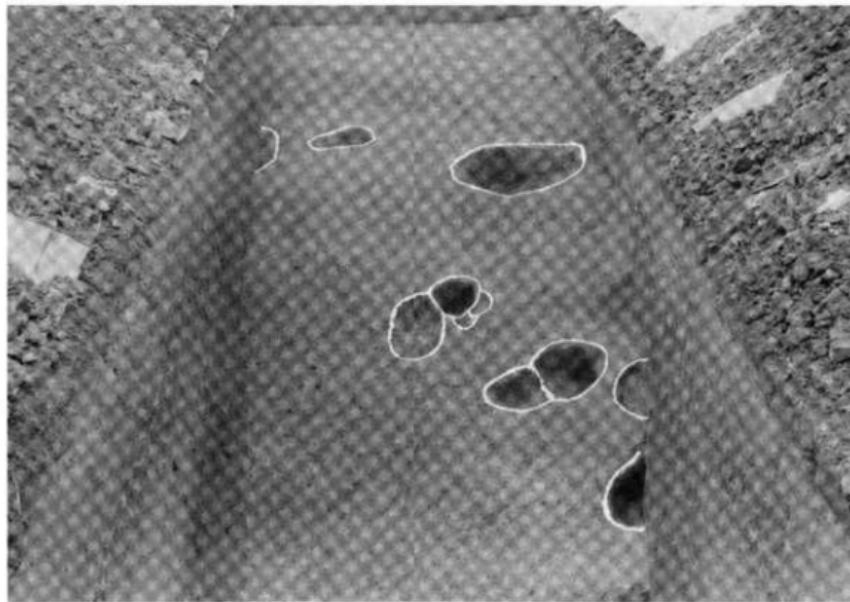
東より



東 断面(西より)



柱 穴(東より)



柱 穴(西より)



1



3



2



4



5



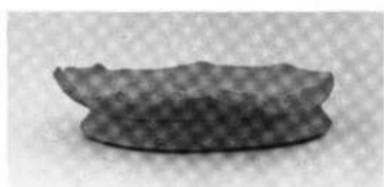
6



7



8



9



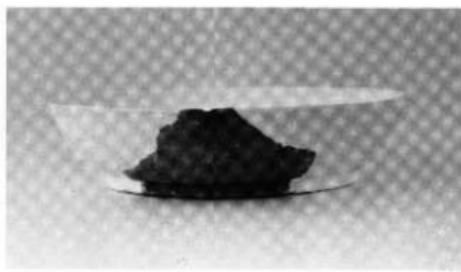
10



11



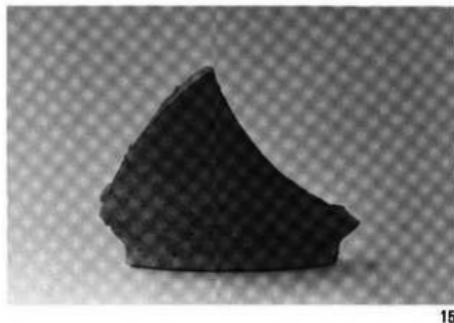
12



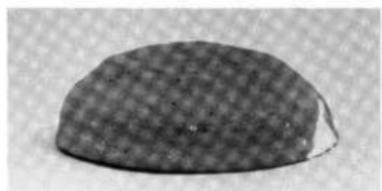
13



14



15



16



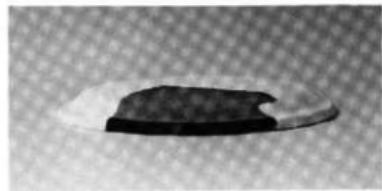
19



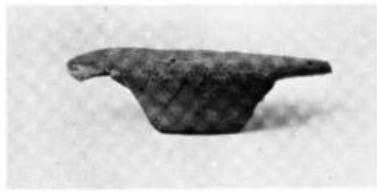
17



20



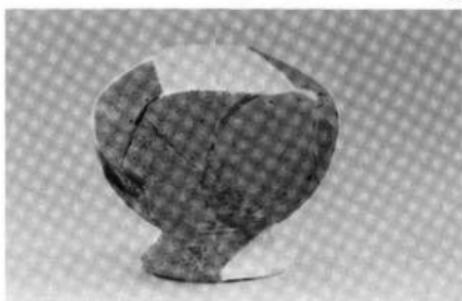
18



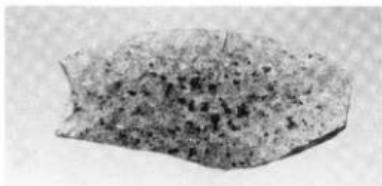
21



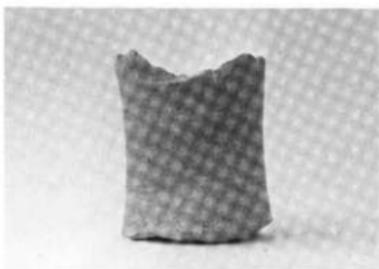
22



23



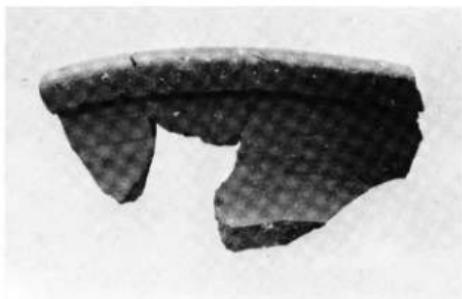
24



25



26



30



33



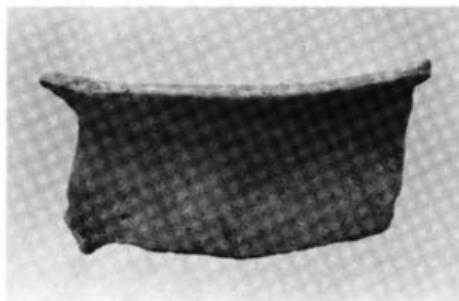
27



28



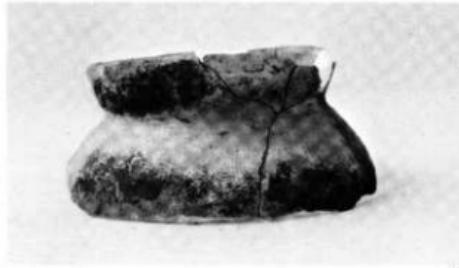
29



31



34



35



36



39



42



37



40



38



41



44



45



43



47



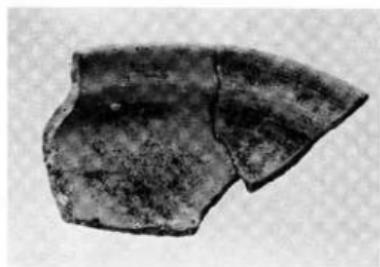
46



48



49



50



51



52



53



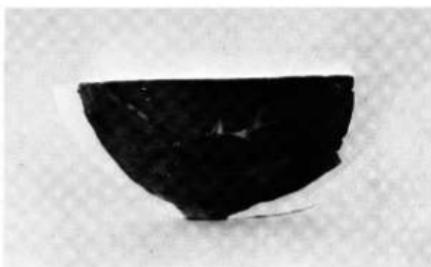
54



52



55



53



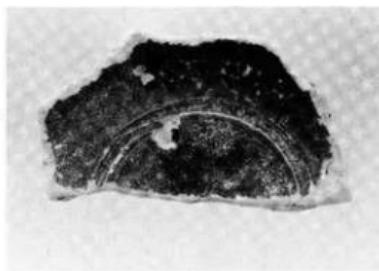
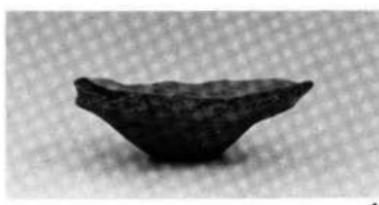
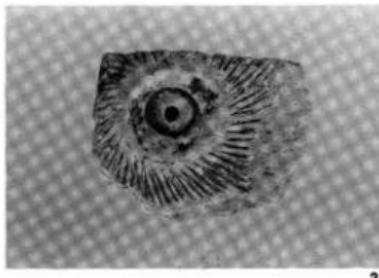
56



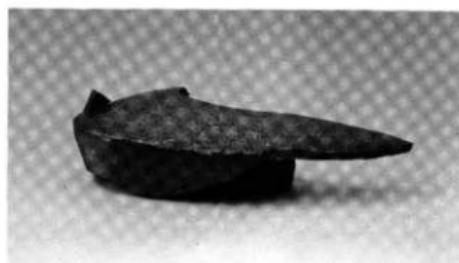
54



57



綠釉陶器片



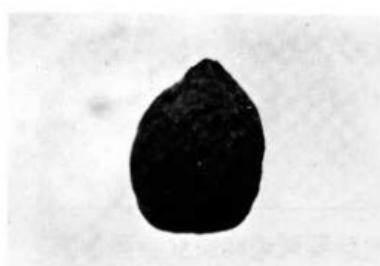
平瓶



かまど片



円筒埴輪片



くるみの実



古銭

高宮廃寺発掘調査概要報告 VI

昭和60年3月 発行

編集 寝屋川市教育委員会

寝屋川市教育委員会

発行 大阪府寝屋川市本町1番1号

